

髓

—— 理のない理性 ——

鞠久
類

目次

序文	2
朝のホームルーム	4
1 時間目 読み物「ごん狐」	10
道徳ノート1 言葉とコミュニケーション	44
ワークシート1	48
ミニ授業1 道徳「謝罪三度一致」	56
2 時間目 読み物「よだかの星」からの脱線	68
道徳ノート2 権利と生存戦略	106
ワークシート2	108

ミニ授業2 国語「文章と意図の読解」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

結論・・・

序文

「道徳」とは一体何なのだろうか。

私たちは、人生で幾度となくその問いの前に立たされる。白か黒かでは到底割り切れない問題に直面し、一つの正解などない現実の複雑さに戸惑う。しかし、教室という空間で「道徳」が語られるとき、その豊かさはしばしば色褪せてしまう。

いつしか私たちは、一つの「正しい答え」を探すようになってしまっていないだろうか。他者の意見を「間違い」と断じ、用意された「模範解答」に辿り着くことが、道徳を学ぶことだと錯覚してはいないだろうか。その結果、授業は思考の冒険ではなく、「正解」を探し当てるだけのクイズと化する。

本書は、その現状に対する一つの応答であり、ささやかな挑戦でもある。

この物語の出発点として、パブリック・ドメイン（公共財産）である作品から扱

う読み物を選定した。そこに秘められた、人間社会の本質を突く豊かなテーマ群。その可能性を、教室の中で最大限に解き放つことはできないだろうか。

理論を語るだけでは、人の心は動かない。教育の真価は、生徒と教師が織りなす、予測不能で生きた対話の中にこそ宿る。だからこそ本書は「教育シミュレーション小説」という手法を選んだ。読者には、物語の教室の一員として授業を追体験してもらい、その中で登場人物たちと共に悩み、考え、自分自身の心と向き合ってほしい。

この物語が目指すのは、新たな「模範解答」の提示ではない。むしろ、その逆である。道徳とは、記憶すべき知識ではなく、変化し続ける状況の中でその都度、最適解を判断していく能力そのものである。本書が描く授業風景を通して、読者一人ひとりが、誰かに与えられたものではない、自分だけの「ものさし」を心の中に築き上げる一助となれたなら、作者としてこれ以上の喜びはない。

さあ、教室の扉を開こう。答えのない問いを巡る私たちの授業が、今、始まる。

二〇二六年一月

鞠久 類

朝のホームルーム

ガラツと音を立てて扉が開く。

「おはよう」

先生が教壇に立つと、それまで少しざわついていた教室の空気がすつと澄んでいく。窓から差し込む温かな光は、生徒たちの机を柔らかく照らしている。

「じゃあ、ちょっと早いけど席についてくれる？　これから道徳の授業が始まるわけやけど、その前に、このクラスの道徳の授業で大事にしてほしいルールの話をしようと思う。みんな、道徳って一言で言うたら何やと思う？」

先生の突然の問いかけに、生徒たちは一瞬きよんとして顔を見合わせた。

真っ先に手を挙げて、元氣よく答えたのは陽奈だった。

「はい！　私は『優しさ』やと思います！　困ってる人を助けるとか、席を譲ると

か……そういう『良いこと』！」

拓也も、眼鏡の位置を直しながら冷静に答えた。

「僕は『ルール』だと思っています。人が集まって社会生活を送る上で、秩序を守るために必要な決まり事……。それが道徳の定義だと考えます」

竜二は頬杖をついたまま、聞こえるか聞こえないかの声でボソツと呟く。

「……はっ、くだらねえ。『綺麗事』だろ。どうせ大人が喜ぶような耳障りの良いことと言わされるだけだしな。時間の無駄や」

海翔は苦笑しつつ、優しい口調で話した。

「俺は『思いやり』かなあ。みんなが喧嘩せずにうまくやっていくための潤滑油、みたいなもんちゃう？」

純平は陽奈と海翔の意見を聞きながら緩く頷いた。

「んー、僕も海翔に近いかな。『居心地の良い空間づくり』……とか？ 具体的に言おうと思ったら難しいけど、嫌な気分にならんためのやつ」

美緒と大輝は静かに机を眺めているが、それぞれに頭の中でいろいろな考えを巡らせているようだ。

「なるほどな。全部良い考えやと思うわ。僕も海翔くんと同じで『思いやり』のこ

とかなと思う。互いのことを認め合い、想像し合って、自分も周りもみんなが気持ちよく毎日を過ごせるようにする。それがこの授業で一番大切にしたいことや。そのために、この授業には大事な大前提が二つある」

先生は指を二本立てて見せる。

「一つ目。人によって考え方は違うってこと。これから色々なテーマで話し合っていく中で、隣の席の子が自分とは違う意見を出してくれるかもしれない。それを『間違いや』って否定するんじゃないくて、『そんな考え方もあるんやな』っていうふうに思っってほしいねん。『自分とは違う』ってのを認めることが思いやりの第一歩やと思う」

先生の話に生徒たちは静かに頷く。

「ほんで二つ目。道徳に『模範解答』はないってこと。たった一つの絶対的な答えなんて、道徳にはないんや。たとえば、満員電車でお年寄りが乗ってきたら『席を譲ったほうが良さそう』って思っかもしれへんな。『でも、ほんまにその人は譲られて嬉しいんやろうか』とか『満員電車で席を立てて譲るのは、周りに迷惑をかけへんやろうか』とか。そういつたことを考えたら、『譲らへん』っていう判断が最適解になることもあるのが分かると思う。みんなには、この授業でいろん

な考えを深掘りして、場面に合わせた『最適解』を見つける力をつけてほしい」先生の「模範解答はない」「席を譲るのが正解とは限らない」という言葉に、教室の空気が少し変わった。生徒たちは、今まで受けてきた「良い子であれ」という道徳の授業とは違う気配を感じ取ったようだ。

「えっ、そうなんですか!? 席を譲るのって、絶対良いことやと思ってました……。『譲らへんのが正解』なんてこと、あるんや……」

「……なるほど。『行為そのものの善悪』ではなく、その場の状況や結果を含めた『最適解』を求めるということですね。確かに、満員電車での移動リスクを考慮すれば、譲らないほうが合理的というケースもあり得ますね」

「ふんっ。『答えがない』って言っとけば、何言っても許されるからな。便利な言葉やで。まあ、『とりあえず良いことしなさい』って押し付けられるよりはマシやけどな」

「最適解かあ……。難しそうやけど、まあ、みんな違っていいなら気楽でええか。喧嘩するのもしんどいし」

「なるほどな。状況に合わせてベストな手を選ぶ……って、なんかゲームみたいで面白そうやん。ただの『良い話』を聞いて終わり、ってわけじゃなさそうやな」

先生は教室全体をゆっくりと見渡し、最後ににこっと笑いかけた。

「だから、考え方の違いを恐れずに安心して自分の言葉で話してな。みんなの意見を聞けるの楽しみにしてるで」

先生の温かい言葉に、教室の緊張が少しほぐれる。特に、対立や批判を恐れていた大輝や美緒は先生の言葉に静かに頷く。

優しい沈黙の中に、授業開始を告げるチャイムが響き渡る。

1 時間目 読み物 「ごん狐」

「じゃあ始めていこか」

先生の言葉に反応して、海翔が号令をかける。

「起立。礼」

「お願いします」

先生は、前からワークシートを配りながら話す。

「さて、最初に伝えとくんやけど、僕の授業は、密度の濃い内容にしたいから毎回駆け足になると思う。脳みそフル回転で疲れるかもしれないけど、頑張っついてきてな。じゃあテキストの3ページ開いて。『ごん狐』を使ってやっていくよ。みんな宿題でちゃんと読んできてくれた？ 読めてない子、正直に挙手！」

生徒たちの手は挙がらない。

「読んでこんわけないやん！ ……ていうか先生、これ反則やわ。小学校の教科書でも読んだことあったけど、今になって読み返したら、余計に泣けてきて……。

昨日の夜、部屋でボロボロ泣いてもた」

「はっ、ガキじゃあるまいし。こんなん、小学生が読むやつやろ。結末も分かってる話を今さら読ませて、何が楽しいねん。……まあ、一応読んではきたけどな。

暇やったし」

「宿題として出された以上、読んでくるのは当然の義務です。小学校のときは違って、今回は物語の構造や、兵十とごんの行動の因果関係について、論理的に整理しながら読んできました」

「ん、僕も読んだよ。なんやろな……彼岸花が咲いてることか、月の晩の静かな感じとか。話の内容はキツイけど、風景の描写はずっと綺麗やなって、改めて思ったな」

「おっしや、みんなありがとうな。これ、僕が授業中に読んでたら、みんな眠くなるし意見交換の時間が減るやろ？ だから次回からも宿題で読み込んできてな。国語の授業じゃないから、自分の感性で読んでくれたらいいからね。さて、たぶん小学校でも読んだことがあると思うんやけど、どうやった？ 読んだ感想言っ

てみてか」

「……私はやつぱり、最後が悲しすぎました……。ごんは謝りたかっただけなのに、兵十に『ありがとう』って言ってもらう前に撃たれちゃって……。兵十が気づいたときにはもう遅くて。すれ違いが、すごく切なかったです……」

「自業自得やろ。そもそも、弱ってる母親が食うはずだったうなぎを、遊び半分で盗んだのはごんやし。あとから栗とか松茸とかコソコソ置いていったところで、最初にやった罪が消えるわけじゃないやんけ。兵十からしたら、親の敵みたいなもんや。撃たれても文句言えへんやろ」

「僕も美緒ちゃんと似てるかな。悲しいっていうか、なんか……寂しい話やなっと思った。ごんも一人ぼっちやし、兵十もお母が死んで一人ぼっちになっ……。テキストの字面を読んでるだけでも、彼岸花の赤とか、最後の青い煙とか、なんか色がすごく鮮やかで……余計にその寂しさが際立ってる気がした」

「なるほどな。竜二の言う『因果応報』も一理あるし、美緒の言う『悲劇』も分かるわ。俺が気になったのは、『伝わらないもどかしさ』かな。ごんは兵十のためにやってたのに、兵十はそれを『神様のしわざ』やと勘違いして感謝してたやろ？ ああ、相手が見ていないところで尽くす『無償の愛』みたいなのが報われ

へんまま終わるのが……なんとも言えん気持ちになったわ」

「うん、なんか終わり方が切ないよな。じゃあ、ちよつとずつ考えていこか」

先生は生徒たちの意見を受けて授業に引き込む。

「ごんはいたずらばっかしてたよな。なんでいたずらしてたんやろうか」

先生は、クラス全員に語りかけるように、ゆっくりと視線を配る。

「それはやつぱり、一人ぼっちで寂しかったからやと思う！ ほら、テキストにも

『ひとりぼっちの小狐で』って書いてあったやん。誰かに構ってほしかったというか……『こっち見て！』っていうサインやったんじゃないかな」

「……僕も陽奈さんと同じで、寂しさが理由かなって思いました。でも、やり方がちよつと不器用というか……。いたずらしたら、村の人に追いかけられたりするじゃないですか。ごんにとっては、そうやって追いかけっこするのも、一瞬の触れ合いみたいに感じてたのかなって……」

「寂しいからって何してもええわけちゃうやろ。こいつ、ただの『暇潰し』やで。

誰かを困らせて、自分だけニヤニヤ見てる……。SNSで炎上動画上げてるやつと一緒やんけ。『寂しいから』なんか、やっていい理由にはならんやろ」

「……まあ、竜二の言うことも分かるけど、ごんにとってはそれが『日常』やった

んかもな。深い意味はなくて、ただ面白いからやる。そのときのごんには多分、それが悪いことやっている実感がなかったんじゃないかなって思う。……その場のノリ、というか」

「客観的に見れば、ごんは自分の行動が他者に与える損害を計算できてないです。兵十がうなぎを捕っている理由が病気の母親のためであるという可能性を考えようともしなかった。つまり『相手の立場に立つ』という思考プロセスが完全に欠落していたと言えます」

「なるほどな。僕は純平くんと似てて、このときのごんはただ楽しかっただけちゃうかな、って思った。暇だからいたずらをする。もしかしたら寂しさとかもあったかもしれないけど、ごん自身も気づいてない気がする」

「……先生の言う通り、テキストにも『ちよいといたずらがしたくなった』と書いてあります。でも、動機が『楽しかっただけ』というのは、結果の重大さを考えるとかえって残酷ですね。兵十のお母さんは床について、うなぎを食べたいと思いながら死んでしまった。『悪気はなかった』で済まされる話じゃありません。社会では通用しない論理です」

「うう……拓也くんの言う通りやけど、キツいなあ……。ごんは、兵十がはりきり

網でうなぎを捕ってるのを見て、ただの魚捕りやと思ったんやろうね。まさかそれが、死にそうなお母さんのための大事なうなぎやなんて、想像もしてなかった。『知らない』って、ときにはすごく怖いことになるんやなって思った……」

「甘いな、陽奈。想像してなかったから何やねん。ごんはうなぎを逃がすだけじゃなくて、自分で首に巻き付かれたりして、完全に遊んでるやろ。相手が必死こいてやってる仕事を邪魔して喜んでる時点で、性格悪いわ。俺やったら、理由が何であれ、邪魔された時点でボコボコにするけどな」

「はは、竜二は容赦ないな。でも、その『ギャップ』がこの話の肝なんやろな。ごんにとっては『軽い遊び』やったけど、兵十にとっては『命に関わる問題』やった。その温度差が凄まじいから、後でお母さんが死んだっていう事実に気づいたときのショックがでかかったんやと思うわ」

「うん……海翔の言う通りやな。彼岸花が赤く咲いてる中を、白い着物の葬列が通っていくやろ。あの赤と白の対比みたいのに、『遊び』と『死』っていう極端なものや並んでるから、なんか胸がザワザワするんやと思う。ごんも、自分がやったことの重さに、この葬式を見て初めて気付いたんやろうな」

「じゃあ、雨が降り続いて穴の中にしゃがんでるときはどういう気持ちでおったや

ろか」

「雨の間の気持ちかあ……。僕やったら、シンプルに退屈で死にそうになるかも。

二、三日も外に出れんと、薄暗い穴の中でじっとしてるんやろ？ スマホもないし、することもない。ただ雨の音がザアザア聞こえてくるだけで……。なんか、世界から自分だけ切り離されたみたいな、めっちゃ重たい気分になりそう」

美緒は純平の意見に小さく何度も頷いている。

「俺なら、腹減ってイライラするな。外に出られねえってことは、狩りもできねえってことやろ。退屈な上に空腹とか、最悪やん。雨が上がった瞬間に『よしや、暴れたるわ！』ってなるのも無理ないやろ。だってそんな、ストレス溜まりまくりやんけ」

「あ、それ分かるかも！ だから雨が上がったとき、ごんは『ほっとして』穴から這い出たんでしょ？ 外に出られた嬉しさでテンション上がっちゃって、ついまたイタズラ心がうずいちゃったのかも。『やつと自由になれた！』みたいな解放感があったんやと思う」

「暇やったやろうし、寂しかったやろうな。もちろん腹も減るわな」

先生は生徒たちの意見を拾い上げながら続ける。

「ほんで雨が上がりて兵十にいたずらをしたよな。その後、お葬式の場面。『ああ、葬式だ』『兵十の家のだれが死んだんだろう』『ははん、死んだのは兵十のおつ母だ』このときのごんは何を思ってたやろうか」

「『ははん』やで？ 人が死んでんのに、謎解きが解けたみたいに納得してるだけやんけ。こいつ、完全に野次馬根性で見とるだけや。兵十が元氣ないの見て『しおれてる』とか分析してるけど、そこに同情なんかないやろ。他人の不幸を、ただの『イベント』として消費しとる感じがして、ほんま胸糞悪いわ」

「……竜二の指摘は正しいと思います。この時点でのごんの思考は『誰が死んだのか』という事実確認に終始しています。彼岸花が踏み折られている描写や兵十の顔色の観察はありますが、そこから『悲しい』という感情の記述は見当たりません。あくまで、客観的な観察者の立場に留まっています」

「僕も、まだ他人事やったんやと思う。テキストに書いてあるけど、彼岸花が赤い布みたいに咲いてるところに、真っ白な着物の人が列になって歩いていくやろ。その赤と白の色が、なんかすごい強烈で……。ごんは六地藏さんの影に隠れて、ただその景色を『すげえなあ』って目で追ってただけなんちゃうかな。カーン、カーンって鐘の音も響いてて、なんか空気がピリツとしてる……そういうのを肌

で感じてただけやと思う」

「まだこの時点では事の重大さに気付いてなさそうやな。じゃあ穴の中で考えてる『兵十のおっ母は、床についていて……』っていうところ。このときはどう思ってるやろう」

「……後悔で胸がいっぱいだったと思います。『ちょっと、あんないたずらをしなけりゃよかった』って……。兵十のおっ母が死んでしまったのは、自分がうなぎを盗んだからだ、って自分で決めつけちゃって……。自分のせいで人が死んだなんて、一人ぼっちの穴の中で考え出したら、もう怖くてたまらなかったと思います」

「美緒さんの言う通り、ごんはここで強烈な自責の念に駆られていますますが、それは全て『推測』に基づいています。『うなぎが食べたいと言ったにちがいない』『死んじゃったにちがいない』。事実は確認していないのに、ごんの中では『自分のいたずらがおっ母の死を招いた』という因果関係が確定してしまっている。飛躍した論理だと思いますが、本人にとってはそれが『真実』になってしまっているのがツライところです」

「……ま、全部ごんの妄想やけどな。勝手に『うなぎ食いたかったはずや』って決

めつけて、勝手に『俺が殺した』って落ち込んで。悲劇のヒロインかよ。自分が悪いって思うことで、逆に『俺は重要な存在なんや』って確認したいだけちゃうか。独りよがりもいいところや」

「んー……。僕はなんか、その穴の中の『空気』がキツいなって思う。さっきまで外でうなぎ追いかけて回して、ヌルヌルした感触とか、兵十の怒鳴り声とか、生き生きした感覚があったやん？ でも今は、シーンとした穴の中で、ただじっとして考えてるだけ。外の楽しかった記憶と、今の重たい気分の落差が激しすぎて……。ごん自身、どうしたらいいか分からなくなってたんとちゃうかな」

「そうやな。『うなぎが食べたかった』とかはあくまでもごんの推測でしかないけど、このタイミングで罪の意識が変わってそうではあるよな」

「……確かに、事実がどうあれ、ごんの中で認識が『ただの遊び』から『取り返しのつかない罪』に変わった瞬間です。この認識の転換が、この後のいわしや栗を持つていくという、非合理的な……いえ、償いの行動の動機になっています。自分一人で勝手に背負い込んで、勝手に解決しようとする。良くも悪くも、独りよがりな『責任感』が芽生えたと言えます」

「うん……。おっ母が本当にうなぎ食べたかったかは分からんけど、ごんが『そう

や』って信じ込んでることが悲しいわ。もう謝る相手もおらへんのに、自分を責めることしかできへんなんて……。この『罪の意識』が、ごんを突き動かしていくんやね」

「その『罪の意識』が、ただ落ち込むだけじゃなくて、次の行動に繋がっていくんやろうな。何か埋め合わせをせなアカン、って。相手には伝わらへんかもしれないけど、じっとしてられへん気持ちは分かるわ。そこは、ごんさんの誠実さなんかもしれん」

「はっ、海翔は能天気やな。埋め合わせ？ そんなもん、ただの自己満足やろうが。死んだ人間は帰ってこん。栗なんか貰っても、兵十からしたら『何やこれ？』って気味悪いだけや。自分の罪悪感を消してスッキリしたいだけで、相手の迷惑とか考えてへんわ。結局、自分のことしか見えてへんのやって、こいつは」

「確かにな。竜二くん鋭いと思うわ。兵十を見ながら『おれと同じ一人ぼっちの兵十か』って思って、そのあと償いとしていわしを投げ入れた。このいわし、償いになってた？」

先生の言葉に、竜二は得意気になる。

「な？ 俺の言った通りやろ。償いどころか、兵十、いわし屋にボコボコにされて

怪我しとるやんけ。『盗人』扱いされて、酷い目にあわされて……。これ、ただの『追い討ち』やで。親切のつもりか知らんけど、結果だけ見たら兵十にとってごんは『疫病神』でしかない」

「うう……ほんまや……最悪の結果やん……。ごんは『まず一つ良いことをした』って思ってるけど、兵十からしたらいきなり泥棒扱いされて殴られて……。良かれと思ってやったことが、全部裏目に出て……。すれ違いすぎて、見ててツライ……」

「そもそも、手段が間違っています。ごんは、いわし屋からいわしを盗んで、それを兵十の家に投げ込みました。『うなぎを盗んだ償い』をするために、また『盗み』を働いている。負債を返すために借金をしているようなものです。倫理的にも破綻していますし、結果として兵十に実害が出ている以上、これは償いとは呼べません」

純平も、投げる仕草を真似しながら口を開く。

「僕も……なんか、やり方が『雑』やなって思った。『投げ込んで』って書いてあるけど、いきなり家の中に生魚が飛んできたら普通に怖くない？ プレゼントって感じじゃないよな。ごんの『勢い』だけでやってる感じで……相手がどう受け取

るかとか、その場の空気とか、全然見えてへん感じがする」

「確かに！ 生魚が飛んでくるの想像したら怖い笑笑 結果としてごんの行動は『盗み』で、兵十に濡れ衣を着せることにもなった。だから行動としては間違ってる。でも、動機自体は認めてあげたいよね」

先生の「動機は認めてあげたい」というフォローにクラスの空気は少し和らぐが、それでも評価は分かれる。

「そうやんな！ やり方はめっちゃくちゃやったけど、きっかけは『おれと同じ一人ぼっちの兵十か』って思ったからやもんね。自分と同じ寂しさを兵十の中に見て『なんとかしてあげたい』って心が動いた。その『共感』みたいな気持ち自体は、すごく優しいと思う！」

「俺もそう思うで。今までは自分の楽しさだけで動いてたのが、ここでは初めて『相手のため』を思って動いたわけやん。結果は失敗やったけど、心のベクトルが自分以外に向いたってことは、ごんにとってはすごく大きな変化やったんちゃうかな」

「……私も、その気持ちは……嘘じゃないと思います」

「ふんっ。ま、気持ちだけはな。でも『地獄への道は善意で舗装されてる』って言

葉知ってるか？ 動機が善意だろうが、やってることは『泥棒』の上書きやろ。

『良いことした』って思ってるのはごんだけで、現実には誰も幸せになってへん。

動機を認めるってのは大事かもしれないけど、それで罪が軽くなるわけちゃうぞ」

「そう。『褒める』と『認める』は違うんよ。ごんの動機は褒められたもんじゃない。なんならごん自身は兵十のお母さんを死なせてしまった罪の意識もあるんだから、軽率すぎた気もする。でも、償いたい気持ちは本物やったよな」

先生の言葉に、生徒たちは納得したような表情を見せる。

「……なるほど、非常に論理的な区分けです。『褒める』は結果に対するプラスの評価ですが、『認める』はその事実の存在を受け入れること。ごんの『盗み』という手段は決して褒められませんが、その根底にあった『償いたい』という意志の存在そのものは、事実として認めるべきだ……ということですね。それなら、僕も同意できます」

「……ちっ。言葉遊びやんけ。ま、でも『褒められたもんじゃない』ってのは同意やな。動機が本物だろうが偽物だろうが、結果的に兵十は殴られてるし。ただ、ごんが反省して自分なりに動こうとしたその『エネルギー』だけは、まあ、認めてやってもいいかもな」

「……良かったです。もし『償いたい』っていう気持ちまで否定されちゃったら、ごんがあまりにも救われない気がして……。やり方は間違ってたけど、『なんとかしたい』って必死だった気持ちだけは、嘘じゃなかったと思うから……。そこを認めてもらえるだけで、ちょっとだけ救われる気がします」

大輝は美緒の言葉に小さく頷きながら、静かに口を開く。

「……でも、切ないですね。その『本物の気持ち』が、空回りして兵十さんを傷つけちゃったわけです。気持ちが強ければ強いほど、うまくいかなかったときの悲しさも大きくなる気がします。ごんも、兵十さんの顔の傷を見て『しまった』って思ったとき、自分の無力さとか、やり方の間違いに気づいて、すごく苦しかったんじゃないかな……」

「そう、気持ちいが本物なら何してもいいわけじゃない。だからこそ、気持ちは認めつつ過ちに気付かせてあげることが大事なんだと思う。次に繋げるために。多分ごんは、いわしを投げ込むことで『モノによる償い』っていう方法に気付いて、次の日には自分で栗を拾って届けた。『これはしまった』って思ってるあたりで、自分で間違いに気付いたんやろうな。でも自分で拾って届ける方法は正しいと信じた。栗だけでなく、まつたけも届けてたな。さて、これを踏まえてテキストの

13 ページ。何か気になることない？」

「……ほら見ろ。結局こいつ、見返りが欲しいだけやん。『神さまにお礼を言うんじゃア、おれは、引き合わないなあ』って。『引き合わない』って何やねん。損得勘定かよ。償いするためにやってたんちゃうんか？ 感謝されたい、褒められたいっていう下心が丸見えでシラけるわ」

「うーん……竜二くんの言うことも分かるけど……。でも、ここちょっと切くない？ ごんは『へえ、こいつはつまらないな』って思ってるんやけど、それって『ありがとう』って言われたかったってことやんね。償いたい気持ちもあったやろうけど、それ以上に、兵十と『繋がり』を持ちたかったんかなって……。『神様のしわざ』って思われて兵十との関係が結べなかったことが、寂しかったんちゃうかなあ」

「……これは矛盾しています。『償い』とは、自分が犯した罪のマイナスを埋め合わせる行為であって、本来、プラスである相手からの感謝を期待するものではありません。しかし、ごんは『お礼を言わない』ことに不満を持っています。これは、行動の動機が『罪滅ぼし』から『承認欲求』……つまり『自分を認めてほしい』という欲求にすり替わっている証拠です。自己中心的と言わざるを得ません」

「まあ、拓也の言うことは正論やけどさ。僕はごんの気持ち、ちょっと分かるかも。毎日毎日、山で栗拾って、見つからんようにコソコソ運んで……結構な重労働やん？ それを『神様のしわざ』の一言で片付けられたら、『俺の苦労は？』ってなりそう。理屈じゃなくて、単純に『張り合いがない』っていうか……ガクツとなる空気感は、リアルやと思うな」

「もしかしたら『僕がやったんだよ』って、兵十に知ってほしかっただけなのかも……」

純平と美緒の意見を聞いて、陽奈と海翔が優しく頷く。

「『感謝されないなんて……』って、ごんはそう思ってるよな。自分が認められず他人が感謝されるのが割に合わないと思う気持ちも分かる。でも、この償いは自分のためじゃないんだよな。相手のため。それを強く思っていれば不満には思わないと思う。見返りを求めると不満が出てくる」

先生の「見返りを求めると不満が出る」という言葉は、教室の空気をピリツと引き締めた。生徒たちは、自分自身の経験とも重ね合わせながら、ごんの未熟さと向き合う。

「その通りや。結局、ごんは『俺がやってやった』っていう自己満足に浸りたいだ

けなんよ。『相手のため』とか言いながら、心のどっかで『感謝されたい』『許されたい』って思ってるから、それが満たされへんと不満が出る。ほんまに償う気があるなら、一生影から見てるだけで満足せなアカンはずやろ。『引き合わない』なんてセリフが出る時点で、償いとしては二流やな」

「ええー……竜二くん、厳しいなあ……。先生の言うことも、竜二くんの言うことも正論やと思うけど……。でも、誰にも気づかれずに良いことし続けるって、めっちゃ孤独やん？ 『神様のしわざ』にされちゃったら、ごんの頑張りには誰にも知られへんまま消えてしまうんよ？ 見返りを求めたらアカンのかもしれへんけど、寂しい気持ちになるのは、仕方ない気もする……」

「まあ、そこが『理想』と『現実』の難しいところやな。俺も先生の言う『見返りを求めない』のが一番カッコいいし、正しい償いやと思う。でも、ごんはまだ子ども……っていうか、精神的に未熟やったんやろな。償いたい気持ちと、認めてほしい気持ちがちや混ぜになって……だからこそ、あの『引き合わない』って言葉が出たんやと思う。何というか……、リアルな弱さやな」

「……見返りを求めると、不満が出る……。本当にそうだと思う……。『してあげたのに』って思った瞬間に、優しさが押し付けになっちゃう……。ごんは、兵

十と仲良くなりたかったから余計に『僕だよ』って言いたくなっちゃったのかな……」

「見返りを求めない』ってのは綺麗事に聞こえるかもしれない。でも実際に僕は不満に思ったことがない。僕が不満に思うのは『礼儀』が欠けた人を見たときだけ。プレゼントをもらって『ありがとう』を言うのは一種の礼儀だよ。それは見返りじゃない。『ありがとう』が欲しいわけじゃないから。でもごんのは違ふよね。みんな『ありがとう』ってさ、誰かも分らない、目の前にいない人に向かって言う？」

先生の指摘に、生徒たちはハツとした表情を浮かべる。ごんの不満が、いかに理不尽なものであるかが浮き彫りになっていく。

純平は想像して少し笑いながら答える。

「そりゃそうやな。誰もおらへんのに、壁とか天井に向かって『ありがとう』ございます！』とか叫んでたら、ただのヤバイ奴やん。神棚にお礼を言うてる兵十の方が、よっぽどまともな行動やと思うわ。ごんは隠れてコソコソ見てるだけなんやから、それにお礼言えっていうほうが無理あるわな」

「確かに！ たたとえば、下駄箱にプレゼントが入ってて名前が書いてなかった

ら……『ラッキー!』とは思うけど、『ありがとう』って誰に言えいいのか分からんもん。キョロキョロして『誰?』ってなるだけやんね。ごんは『僕やで!』って気付いてほしいけど、自分から言う勇氣はない……。なんか、恋する乙女みたいやけど、やってることは空回りしてるなあ」

「……先生の仰る通り、礼儀とは『相手』がいて初めて成立するコミュニケーションです。ごんは自ら姿を隠し、相手に認識されない方法を選んでいきます。通信回線を自分で切っておきながら、『メッセージが届かない』と不満を言っているようなものです。兵十に『礼儀知らず』という非はありません。認識できない相手に礼を尽くすことは、物理的に不可能ですから」

「だから言うてるやん。こいつは『半端』なんよ。撃たれるのが怖いから隠れる。でも、感謝はされたい。リスクは負いたくないけど、リターンは欲しい。そんな虫のいい話があるかよ。ほんまに感謝されたかったら、命懸けで『俺がやったんや!』って出ていく根性が要るんじゃ。それをせんかった時点で、文句言う資格なしやろ」

「そういうこと。でも、ごんは認められなくても自分の行動が正しいと信じ続けてた。だからこそ、あくる日も栗を持って行ったんやろうな」

「うん……。文句言いながらも、次の日もまた栗を持って行って……。やっぱり、ごんは兵十のことが好きやったんやと思う。『認められんでも、やるんや!』っていうその根性だけは、すごくいじらしいなって思うな……」

「でも、その『信じ込み』が命取りになったんやろ。正しいことしてるって思い込んで気が緩んだんか知らんけど、この日は家の中まで入り込んでもうてる。それまでは物置にこっそり置いてたのに。『自分は良いことをしてる』っていう油断が、一番のリスクやったんとちゃうんか?」

「……同じ行動を繰り返せば発覚のリスクは高まります。しかも今回は行動がエスカレートして、不法侵入を犯してしまった。ごんの『正しいと信じる気持ち』が、皮肉にも安全確認という論理的な判断力を鈍らせ、最悪の結果へのトリガーになってしまいました」

「兵十は物置で縄をなつて、ふと顔を上げたらそこに狐がおる。その瞬間の『うわ!』っていう驚きとか、緊張感とか……想像すると怖いよな。ごんは栗を置いてるだけなのに、兵十から見たら『また悪さをしに來たいたずら狐』にしか見えへんもんな……」

美緒や大輝は、竜二や純平の意見に、小さくも強く頷いた。

「ところで、兵十は『ごんがまたいたずらをしに来た』って思ってた火縄銃でうったよな。兵十はごんのことを『おっ母を死なせた狐』と思ってたやろうか」

「……テキストの記述を見る限り、兵十がその瞬間に考えたのは『こないだうなぎを盗みやがったあのごん狐めが、またいたずらをしに来たな』という一点のみです。『おっ母を死なせた』という直接的な恨みの言葉は書かれていません。兵十は単に『窃盗の再犯』を防ごうとした、あるいは『過去の窃盗』に対する怒りで発砲したと解釈するのが妥当です」

「いや、書かれてなくても分かるやろ。あの日、兵十が必死でうなぎを捕ってたのは、おっ母のためやんけ。それを盗まれたってことは、おっ母に滋養をつけるチャンスを奪われたってことや。『うなぎを盗んだ』ってのは『おっ母の回復を邪魔した』ってことなんやから、兵十の中ではごんは間違いなく『仇』やろ。だから迷わず引き金引けたんや」

「僕は……なんか『反射的』やったんとちゃうかなって思う。『仇だ！』とか『死なせた！』とか深く考える前に、パツと狐が見えて、カツとなって体が動いた感じ。納屋に火縄銃があったから、すぐ手に取って……。あの瞬間の兵十は、怒りで頭真っ白やったんとちゃうかな」

「うーん……どっちにしても、兵十はごんのこと『悪いやつ』としか思ってたなかったんやね。ごんは『償い』に来てたのに、兵十には『いたずら』にしか見えてなかった。この『思い込み』のズレが一番悲しい……」

「僕も拓也くんに近いかな。『うなぎを盗んだ狐』『憎たらしい奴』そう思ってたんじゃないかな。だから多分『おっ母を死なせた』ってのはごんの罪の意識が強かっただけやと思うんよ。さて、『ごん、お前だったのか。いつも栗をくれたのは』のところで兵十はどんな気持ちになってるやろうか」

先生の問いかけに、教室は水を打ったように静まり返る。物語のクライマックス、あまりにも残酷な真実に直面した兵十の心を想像し、生徒たちは言葉を選びながら発言する。

「私は……『絶望』だと思います……。兵十はずっと、神様が恵んでくれると思ってたけど、本当は『敵』だと思ってたごんが自分を支えてくれてたんだって気付いて……。独りぼっちの自分を想ってくれた唯一の相手を、自分の手で殺してしまった……。その事實は、兵十にとって、おっ母が死んだときと同じくらい……。いや、もっとツライことだったんじゃないかなって思います」

「僕は、なんか……頭の中が真っ白になったんとちゃうかなって思う。兵十は、火

縄銃を『ばたりと、とり落としました』って書いてあるところ。ショックとか後悔とか、言葉になる前の……なんていうか、全身の力が抜けてしまうような感覚。まだ筒口から青い煙が出てるっていう描写が、取り返しがつかない『終わってしまった感』をすごく出してる気がする」

「……最悪の気分やろ。『盗人』やと思って撃ったら、『恩人』やったわけやから。自分の勘違いで、相手を殺した。しかも相手は、栗を持ってきただけやった。『ざまあみろ』とかいう気持ちは一瞬で消えて、後に残るのは『俺、何してもうたんや』っていう、吐きそうなぐらいの後悔だけやろ。一生、夢見が悪いやろな、これは」

竜二の意見に頷きながら海翔が口を開く。

「『ごん、お前だったのか』っていうセリフ。これ、ただの確認じゃなくて、兵十の『心の叫び』やったんやと思う。もっと早く気づいてやればよかった、もっと早く話せばよかった、っていう。ごんの『償い』がやっと届いた瞬間やけど……それが『死ぬ間際』ってのが、あまりにも遅すぎた。この瞬間の兵十の心には、一生消えへん傷が残ったやろうな」

「その兵十の言葉を聞いたごん。『ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました』

このときどんな気持ちだったやろう」

「……『救われた』って、思ったんじゃないかな。ずっと『引き合わない』って寂しかったけど、最後の最後に、兵十に分かってもらえたから。『盗人』じゃなくて、『栗をくれた優しい狐』として兵十の心に残れた。撃たれて痛かっただろうけど……心は、温かかったと思います」

「僕は……なんか、すごく静かな気持ちやったと思う。『ぐったりと』してるから、もう声も出されへんし、体も動かへん。でも兵十の『お前だったのか』っていう驚いた声が聞こえて……。『うん、そうやで。僕やで』って。最後の力を振り絞って頷いた瞬間、ごんの中のモヤモヤが全部スーッと消えていったんちゃうかな」

「……ま、結果オーライ、ってところか。命と引き換えて代償デカすぎやけどな。でも、あのまま撃たれて死ぬだけやったら、ただの『害獣駆除』や。最後に正体がバレて、兵十に一生消えへん後悔を植え付けた。ある意味、ごんの勝ちやな。『ざまあみろ、俺やで』ってニヤツとして死んだ……とまでは言わんけど、まあ、満足して死んだんとちゃうか」

「竜二くんの言い方はあれやけど、でも『満足』っていうのは分かる気がする。ご

んは、ずっと兵十と繋がりがたかったんやもんね。生きてる間には仲良くなれなかったけど、死ぬ瞬間にだけ、心が通じ合えた。『ありがとう』って言葉はなかったけど、兵十が銃を取り落とすくらいにショックを受けてくれたことが、ごんにとっては何よりの『答え』やったんかもね」

「ここで兵十に自分の行動が認められたわけやな。でも、ごん、ちょっと待て。死ぬのはまだ早い。お前の行動はほんまに『償い』と気付いてもらえたんか？ それでええんか？」

先生の指摘に、生徒たちはハッとして顔を見合わせる。

「……先生の仰る通りです。伝わっていないと考えられます。兵十が言ったのは『いつも栗をくれたのは』お前だったのか、という事実確認だけです。『うなぎの件を反省してくれていたんだな』とか『償いのつもりだったんだな』という解釈には至っていません。兵十の中では、ごんは『うなぎ泥棒』から『栗をくれた親切な狐』に上書きされただけで、その二つが『償い』という線で繋がった証拠はどこにもないです」

「うわ……ほんまや……。私、勝手に『全部伝わった！ 感動！』って思ってたけど……。兵十からしたら『なんでコイツ、栗なんかくれてたんやろ？』っていう

謎は残ったままなんや……。『ごめんね』って気持ちが伝わってへんかったら、それって『償い』完了してへんやん……！ え、待って、それ悲しすぎる……」

「だから言うたやろ。言葉にせな伝わらんや。ごんは『うん』って頷いて死んだけど、それは『栗をあげたのは俺やで』への肯定であって、『うなぎ盗んでごめん』への肯定として伝わった保証はない。結局、ごんの自己満足で終わって、兵十には『なんかよう分からんけど、親切な狐殺してもた』っていうトラウマだけが残る。死ぬのが早いとか遅いとか以前に、コミュニケーションとして失敗してるやろ」

大輝は言葉を発さず、祈るような、どこか悲しそうな目で先生を見つめている。

「まあ、ごん的には満足してそうやから、それでいいのかもしれない。ごんは狐やから、まあ仕方ない。でもみんなは人間同士や。言葉で伝えることができる。」

『ごめん、大事なうなぎやと知らなくて、ちょっとしたいたずらのつもりで……』『お詫びのつもりでいわしを投げ入れたんだ、ごめん』『お詫びに栗をとってきたから、よかったら食べて』って言えてたら『ありがとう。いたずらなんかもうすんなよ』になってたかもしれない、一人ぼっち同士で仲良くなってたかもしれないよな。すれ違いを生まへんためには、自分の気持ちを伝えることが大事や」

「うわぁ……それ、めっちゃ良い……！ 二人で縁側に座って、栗食べながら『あのときはごめん』『もうええよ、食え食え』って笑い合ってる未来もあったかもしれないのやね。言葉ひとつで、撃ち殺される結末が親友になれる結末に変わるのかぁ……。言葉って、魔法みたいやけど……使わな意味ないんやなって思った」

「……言葉は『誤解』というエラーを防ぐための、最強のツールです。ごんが栗を置いたという『事実』だけでは、それが『償い』なのか『罠』なのか、兵十には判断できませんでした。そこに『ごめん』という言葉が加わって初めて、相手は正しく情報を処理できる。僕たちは人間で、言葉という高度な機能が実装されているんだから……それを怠慢で使わないのは、愚かだと言えますね」

「うん……。最後のシーン、筒口から青い煙が出てるだけの終わり方と、先生が言った『仲良くなった未来』の色の違いが凄いわ。煙は冷たくて寂しい色やけど、仲良くなった方は、なんか夕焼けみたいに温かいオレンジ色のイメージがする。僕も大事なことはちゃんと口に出して言おうと思う。あんな冷たい終わりがしたくないし」

「……ま、狐やからしゃあない、で済む話やけどな。でも、俺ら人間がそれをサボったら、狐以下ってことやろ。『言わんでも分かるやろ』とか『察しろよ』と

か、そういう甘えが一番の事故の元なんやな。格好つけて黙って死ぬより、ダサくても『ごめん』って言って生きてる方が、よっぽどマシやわ」

「行動は大事やで。でも、その行動を支える言葉も同じくらいに大事なんや。『行動』だけでは『意図』が伝わらんし、『言葉』だけでは『誠意』が伝わらない。両方をバランスよく使ってあげて」

先生のそのまための言葉に、教室の全員が、この授業で得た一番大切なことを噛み締めるように、深く頷く。

「授業の最後に、僕が考案したとっておきのメソッドを伝授してあげよう。その名も『謝罪三度一致』や」

「謝罪三度一致」という必殺技のようなネーミングに、生徒たちは興味を示す。

「えっ、なにになにそれ！ 『謝罪三度一致』？ なんかのアニメの必殺技みたいやん！ それ使ったら、どんなに怒ってる人でも一発で許してくれたりするん？ めっちゃ気になる！」

「……『三度一致』ですか。謝罪において一致させるべき三つの要素……。推測するに、『思考』『言語』『行動』の三つでしょうか。あるいは、『過去の清算』『現在の反省』『未来の改善』か……。いずれにせよ、論理的な整合性を問うメソッド

のようですね」

「はあ？ 何やねんその怪しい名前。壺でも売りつけられそうなネーミングやな。どうせまた、『心こめて三回頭下げろ』とか、そういう精神論ちゃうんか？ ま、お手並み拝見というか」

「三度一致……サンドイッチ？ ……いや、なんでもない。でも、なんかリズムはいいな。バチッと決まればカッコよさそうやけど、難しそうな気もするわ」

「あはは、みんな食いつきすぎやろ。でも先生が『とっておき』って言うくらいやから、ただの根性論ではないはずや。ごんみたいにすれ違わんための秘策なんやろ？ 先生、もったいぶらんと教えてや！」

「これは『ごめんなさい』っていう謝罪の誠意を最大化するメソッドなんや。

①とりあえず謝罪する。これは反射的なものでいい。悪いことをしたと気付いた瞬間にするべき。

②今できる対応をさっさと済ませる。これが重要。このときに謝罪はいらない。口じゃなく手を動かす。

③心を込めて謝罪する。これでケリをつける。これ以降はもう話題に出さないよ

うにする。

三つのアクションで構成されて、『行動』が『謝罪』にサンドされてる。全体を通して『心』と『行動』が一致するよな」

先生の「謝罪三度一致」の解説を聞いて、生徒たちはその分かりやすさと実践的な内容に、膝を打つような反応を見せる。

「あ、ほんまに『サンドイッチ』やったんや……！ 『言葉』というパンで『行動』という具を挟むってことか。具だけボンって渡されても食べにくいけど、パンで挟んであったら相手も受け取りやすいもんな。そのイメージやったら、僕も忘れるとできそうやわ」

「あっ！ 分かった！ ごんの失敗の原因それやん。ごんは栗を置くっていう『行動』しかしてへんかったんや。うわあ、ごんにこのレシピ教えてあげたかった！」

「……非常に合理的で、実践的なプロトコルです。まずは相手の怒りを鎮め、次に実質的な損害を回復し、最後に感情的な清算を行う。特に『口じゃなく手を動かす』というのは重要ですね。トラブルの際、言い訳をして作業が遅れるのが一番

の悪手ですから。この手順を踏めば、トラブルをむしろ信頼に変えることすら可能かもしれません」

「へえ、悪くねえや。特に『つべこべ言わずにさっさと直せ』ってのが良いな。ミスったときこそ、腕の見せ所か。ほんで『終わったら蒸し返すな』ってのも潔くて良い。いつまでもネチネチ謝られるのも鬱陶しいしな。これなら、俺もやるわ」

「『ごめんなさい』のフルコースって感じやな。これやったら、謝るほうも謝られるほうも、最後はスッキリ終われる。先生、これ最強のメソッドやん。俺ら今日から『謝罪マスター』になれるで」

「『でも言い訳したい……』とお困りのあなた！ 『言い訳できないじゃん……』と思っていないませんか？ 心配ご無用！」

急に始まった先生の通販番組ノリと「心配ご無用！」という言葉に、教室中がどよめく。謝罪に言い訳は禁物、というのが常識だと誰もが思っていたからだ。

『行動』という具と『心からの謝罪』というパンの間に『言い訳』ソースを塗りたくるだけ！ あら不思議。言いたいことは言いつつ謝罪の効力は保たれているではありませんか！」

「あはは！ 先生、何キャラなん！ 深夜の通販番組みたいになってるやん笑笑でも『心配ご無用！』はめっちゃ嬉しいかも！ 私、謝るときどうしても『だって、こうだったんやもん！』って言いたくなって、それで余計に怒られることあるから……。ソースとして挟めばいいんや！ それなら角が立たへん！」

「ソースかぁ……。なるほどね。パンと具だけやと、パサパサして喉に詰まることあるもんな。『なんでそうなったか』っていうソースがちよっとかかっているほうが相手も飲み込みやすいってことか。……先生、喩えが上手すぎてお腹減ってきたわ」

「……『言い訳』を『ソース』と定義するのは、非常に合理的です。メインの食材ではないけれど、全体の印象を整えるためには必要不可欠。『ただの言い訳』だと責任転嫁に聞こえますが、前後に『謝罪』と『対応』があれば、それは『再発防止のための状況説明』として機能します。この配置なら、論理的にも相手を不快にさせませんね」

「胡散臭い通販やな。でもまあ、悪くねえわ。俺も、自分が悪くないのに謝るんだけには死んでも嫌やからな。『俺はこう思ったからやったんや』っていう理屈を、ソースとしてねじ込んでいいなら、まあ、頭下げてやらんこともない。自分のプ

ライドも守れるし」

「そうは言っても、言い訳するのって何か不安やんな。帰りのホームルームで実演してみよ。楽しみにしてて。ほんなら最後ワークシートに感想を書いてか。この授業中に考え方とか向き合い方とか、なんでもいい、ちょっとしたことで成長したことがあったら、感想書くのと一緒に自慢してな」

教室には、自分と向き合う静かで穏やかな時間が流れる。

「……みんな、そろそろワークシート書けたかな。前に送ってきてか」
全員のワークシートが先生の手元に集まり、授業を終える。

「よっしゃ、終わるか」

「起立。礼」

終わりのチャイムが鳴り響く。生徒たちは清々しい顔で声を揃える。

「ありがとうございました」

道徳ノート1 言葉とコミュニケーション

いたずらと想像力の欠如

- ・寂しくて、人と関わりたくていたずらをした。
- ・ただ楽しかった。いたずらは暇潰し。
- ・やり方が不器用すぎる。
- ・相手への想像力が欠けている。

罪の意識と行動

- ・償いの気持ちも、手段を誤ると裏目に出してしまう。
- ・生魚がいきなり飛んでくると怖い。
- ・行動と動機は別で評価してあげたい。

言葉とすれ違い

- ・相手のいない「ありがとう」は礼儀ではない。
- ・礼儀は、人間関係を円滑にするための「プロトコル」である。

- ・ 行動の意図は言葉にして初めて伝わる。
- ・ 言葉に込めた誠意は行動によって表せる。

この時間のまとめ

- ・ 行動をするときには、想像力を働かせる。
- ・ 気持ちを伝えるには、言葉と行動のバランスが大事である。
- ・ 謝罪サンドイッチと言い訳ソースをお忘れなく。

内容項目

- (9) 相互理解、寛容
- (1) 自主、自律、自由と責任
- (6) 思いやり、感謝
- (7) 礼儀
- (10) 遵法精神、公德心
- (19) 生命の尊さ

道徳科学習指導案

生徒：7名
指導者：鞠久 類

1 主題名

言葉とコミュニケーション【内容項目：B-(9) 相互理解、寛容】

(関連する内容項目：A-(1), B-(6), B-(7), C-(10), D-(19))

2 教材名

「ごん狐」新美南吉（『髓一資料編一』より）

3 ねらい

他者との相互理解において、一方的な思い込みや行動だけでは真意が伝わらないことを理解し、相手と心を通わせられるようなコミュニケーションを実践しようとする態度を育てる。

4 主題設定の理由

① 価値観

相互理解とは、単に相手を思う心情だけで成立するものではない。心情を言葉と行動によって適切に表現し、相手に届けるプロセスが必要である。特に過ちを犯した際の「謝罪」や「償い」においては、自己満足的な罪滅ぼしではなく、相手が受け取れる形でのコミュニケーションが不可欠である。本時は、不器用なコミュニケーションの末に悲劇を迎えた「ごん狐」を反面教師とし、論理的かつ誠実な人間関係構築の方法を学ぶことをねらいとする。

② 生徒観

本学級の生徒たちは、それぞれに異なった性格や考えを持っている。トラブルが生じた際に素直に謝れなかったり、言い訳をしてしまったりすることで関係をこじらせる生徒もいるだろう。また「言わなくても分かるだろう」という甘えや「やったからいいだろう」という行動のみでの解決を図ろうとする未熟さも想定される。本時は本学級における最初の授業となるため、他者と関わる上での考え方や接し方を身につけさせたい。

③ 教材観

『ごん狐』は、ごんの孤独と償い、兵十とのすれ違いを描いた名作であるが、本時ではこれを「コミュニケーションの失敗事例」として分析的に扱う。ごんの行動は「償い」の動機に基づいていたが、言葉が欠落していたために、兵十には「いたづら」や「神のしわざ」として誤認された。この構造的欠陥を理解させた上で、解決策として自作のメソッド「謝罪三度一致」を取り上げる。これは「謝罪（言葉）→対応（行動）→謝罪（言葉）」という手順を踏むことで、誠意を最大化する方法である。物語の情緒的な感想に留まらず、実生活に応用可能な「最適解」を模索させる教材として活用する。

	学習活動	主な発問と予想される反応	指導上の留意点・備考
導入	宿題で物語を読み込んでくる。	「宿題で読んできてくれた？」 →「読んできた」「忘れていた」 「読んどう思った？」 →「悲しい」「ツライ」「自業自得」	・宿題の意図を伝える ・軽く感想を聞き、発表しやすい空気を作る
展開	多角的な意見を交換する。	「いたずらの理由は？」 →「暇だった」「寂しかった」 「雨で穴にいるときの気持ちは？」 →「早く出たい」「お腹空いた」 「葬式を見かけたごんの気持ちは？」 →「後悔」「ただの事実確認」 「穴に帰った後のごんの考えは？」 →「自責の念」「償いたい」 「ごんの行動は正しかったか？」 →「償おうとしている。正しい。」 「していることは犯罪。間違い。」 「でも、動機は認めてあげたいね。」 →「確かに。」「いや、過ちは過ち。」 「13 ページ。何か気にならない？」 →「承認欲求」「認められたい」 「『お前だったのか……』と言ったときの兵十の気持ちは？」 →「最悪」「悔しい」「自責の念」 「領いたごんの気持ちは？」 →「償いに気付いてもらえた。」 「本当に『償い』だと兵十に気付いてもらえた？」 →「あ……、本当だ。」	・感情と論理のように対立しがちな意見を広く受け入れる。 ・様々な角度からの発問と想定しなかった良い意見の拾い上げを自然に行うことで、生徒の考えを掘り深める。 ・ごんの行動は犯罪であるという気付きを与える。 ・「認める」という価値観を深める。 ・あえてネガティブな意見を引き出す。 ・兵十には「うなぎの償い」として伝わっていないと気付かせる。
	「謝罪三度一致」というメソッドを手に入れる。		謝罪メソッド「謝罪三度一致」を伝授する。
まとめ	ワークシートに記入する。	「感想を書いて。成長したこととかあったら自慢してね。」	・ワークシートに感想を書かせる。授業内での成長を自慢させる。

<p>ごん狐 (p.3)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多数派の意見 ・気付きを促す意見 ・視野が広がる意見 ・特に深い意見 ……などを拾い上げる 	<p>謝罪三度一致</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;">①謝罪</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;">②行動</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;">③謝罪</div> <p style="margin-left: 100px;">言い訳</p>	<p>まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業中に出的良い意見 ・生徒たちに授けたい言葉 ……などをまとめる <p>※生徒が感想を書いているときに まとめを書く</p>
---	---	---

ワークシート1

陽奈のワークシート

「言い訳ソース」はやっぱり発明やと思います！ 私、いつも怒られたときに「だって……」って言いたくなるけど、我慢して余計にモヤモヤするか、言っちゃって火に油を注ぐかのどっちかだったから。これからは、ちゃんとサンドイッチにして、真ん中にこっそりソース塗ります！ ごんにもこのレシピ教えてあげたかったなあ。

「今日の自慢」

いっつも怒られるとパニックになる私が「あ、こうすれば自分の気持ちも伝えていいんや！」って思えて、次の謝罪がちょっと楽しみ(?)になりました！

これってメンタル最強に近づいたんちゃう？

るい先生より

謝罪も感謝も伝え方次第。言い訳ソースは掛けるタイミングを間違えないよう

にね！ メンタル最強に近づいてるで。めっちゃくちゃええことや！

海翔のワークシート

ほんと兵十のすれ違い、言葉ひとつで結末が変わるっていうのが衝撃やったわ。「ごめん」の一言があれば、あんな悲しい終わり方じゃなくて、もっと温かい未来があったかもしれないのにな。「謝罪三度一致」は、まさに人間関係のフルコースって感じやな。言葉だけじゃなくて、行動で示すっていうのが男らしくてええと思う。

「今日の自慢」

「謝る」＝「負け」じゃないって気付けたわ。むしろ、上手く謝れる男のほうがカッコええやん？ 俺もクラスのみんなと上手くやっていくために、この技を使って謝罪マスター目指すわ！

るい先生より

海翔くんならクラスのみんなと上手くやっていけるわ。自分の気持ちを相手に正しく伝えて、自分も相手も気持ちの良いコミュニケーションにしよう。目指せ謝罪マスター！

大輝のワークシート

ごとと兵十の悲劇は、単なる「誤解」という言葉では片付けられない、もっと深い「心の断絶」だと感じました。二人はずっと孤独で、本当は誰よりも繋がりを求めていたのに、そのための「言葉」という架け橋を持っていなかった。「謝罪三度一致」は、その断絶を乗り越えるための具体的な「儀式」なんですね。形（行動）と言葉を尽くすことで初めて、人の心は救われるのだと学びました。

「今日の自慢」

いつもは授業を聞くだけの僕ですが、今日はごんの痛みを自分のことのように感じられました。そして、その痛みを癒やす方法を、先生から論理的に学べた気がします。少しだけ、人と向き合う勇気を持てそうです。

るい先生より

ええやん！ 苦手でもいい。人と関わる勇気がちょっとでも持てると良いな。大輝くんの意見は聞いていて優しい気持ちになれるから、また自分のタイミン
グで発表して聞かせてな！

美緒のワークシート

言い訳をするのは、やっぱりまだ少し怖いです。いつも、謝るときに言葉が詰まったり、何度も「ごめんなさい」ばかり言ってしまったりしていたので……。でも、先生が「心を込めて謝罪して、それでケリをつける（蒸し返さない）」と言ってくれて、少し心が軽くなりました。いつまでもクヨクヨするのは、相手にとっても良くないですね。

「今日の自慢」

いつもなら「私なんて……」って思うところだけど、今日は「ちゃんと謝って、前を向こう」って思えました。ごんみたいに悲しいすれ違いをしないために、言葉にする勇氣を持ちたいです。

るい先生より

うん分かる。言い訳するのってなかなか怖いよな。でも、言い訳も含めて自分の主張や。どんどん言葉にしていこ！感謝も謝罪も伝え方次第だから、主張することを怖がる必要は意外とないのかもね。謝ればいいっていうものでもないから、いろんな考えに触れる中でバランスを見つけていこな！

純平のワークシート

ごん狐の最後の「青い煙」だけが残る終わり方はやっぱり寂しくて、「言葉があれば、夕焼けみたいに温かい未来があったかも」っていう色のイメージがすごく頭に残ってる。謝罪のサンドイッチも、イメージしやすくて良かった。「ごめん」っていうパンで挟むだけで、相手がパサパサせずに受け取りやすくなるんやな。

「今日の自慢」

難しい理屈は苦手やけど、「サンドイッチ」のイメージなら僕も忘れずにできそう。冷たい煙じゃなくて、温かい色で終われるような謝り方、僕なりにやってみたい。

るい先生より

色のイメージすごく素敵やな。温かいオレンジ色のコミュニケーションをしていきたいね。あと、僕的には「生魚が飛んできたら怖い」が今日のMVPやわ。最高な意見をありがとう！

竜二のワークシート

道徳なんて綺麗事ばっかやと思ってたけど、今日の「謝罪三度一致」は、まあ、理屈は通ってるなと思った。特に「つべこべ言わずにさっさと行動しろ」ってのがシンプルでいい。ミスったときこそ腕の見せ所っていうのは、確かに一理ある。あと「言い訳ソース」な。自分が悪くないときとか、理由があるときに、俺のプライドを守りつつ相手も立てられるなら、使ってやらんこともない。

「今日の自慢」

クソだるい道徳の授業で、寝ずに最後まで聞いてやったこと。あと、このメソッドの有用性を認めてやったこと。感謝しろよ。

るい先生より

ありがとう。クソだるいのは「道徳が綺麗事」だからだよ。そのイメージをぶち壊せるように頑張るわ。てかむしろ竜二くんの意見で「綺麗事」をどんどんぶち壊してくれ！

拓也のワークシート

本日の授業を通じて、コミュニケーションにおける「言語化」の重要性を再認識しました。ごんの失敗は、自己完結した論理で行動し、相手（兵十）への情

報共有を怠った点にあると分析できます。また、提示された「謝罪三度一致」は、トラブルが起きたときのプロトコルとして非常に合理的でした。特に「今できる対応（行動）」を最優先するという工程は、感情論になりがちな謝罪の場を、建設的な問題解決の場へと移行させる優れたアルゴリズムだと感じました。

「今日の自慢」

先生の話聞いてすぐに、脳内で「謝罪実行フローチャート」を完成させました。感情に左右されず、淡々とこの手順を実行できる準備が整っています。

るい先生より

フローチャート、最強やん。コミュニケーションでは「気持ち」「言葉」「行動」がバランスよく必要になってくるよね。想像力を働かせて、摩擦の小さいコミュニケーションにしよう！

道徳ワークシート

[メモ]

[感想]

[今日の自慢]

[自己評価]

YES ⇔ NO

他の人の意見を尊重できた。

4・3・2・1

自分の考えに自信を持てた。

4・3・2・1

感じ方や考え方が広がった。

4・3・2・1

ミニ授業1 道徳「謝罪三度一致」

「帰りのホームルームを始めます。お願いします」

先生は笑みを浮かべて生徒たちの顔を見渡した。

「ほなら授業中に言うてみたいに、謝罪三度一致を実演してみよ。じゃあ竜二くん、なんか日常でやらかす場面思いつく？ 何でもいいで」

「ああん？　なんで俺が。めんどくせえ……。ちっ。しゃあないな。ほな……。あれや。海翔が、休み時間になんか知らんゲームの自慢しとったとするやん。俺が『うっさいわ、ちょっと貸せや』って言うて、ふざけてあいつのスイッチ奪い取ろうとしたら、手が滑ってガシャーンや。床に落ちて、画面バッキバキ」
陽奈や美緒が顔をしかめる。

「……。ほら、最悪の状況やろ。あいつもキレとるわ。……。さあ、これで先生の言う

『謝罪三度一致』とやら、やってみてくれ」

「なかなかの難題やな。おっしゃ、じゃあ海翔くん割られた側頼んでいい？ 僕が竜二くん役するわ」

海翔は驚きつつも役に入り込む。

「……竜二。……お前、何してくれてんねん、マジで。これ、昨日買ったばっかの限定版やぞ。……ふざけんなよ、お前」

教室の空気が一気に凍りつき、陽奈や美緒が息をのむ。

「うわ、まじわりい。ごめん。限定版やったんか。……限定版は無理かもしれんだけど、代わりのスイッチ用意させてくれへんか？」

「……『ごめん』？ 『代わりのスイッチ』？ アホか、お前。本気で言うてんのか？ 『限定版』って言うたやろが。代わりなんかないねん、これ。世界に一つかない俺のスイッチやぞ。昨日買ったばっかなんや。……それを、お前は……。はあ……。もうええわ。……とりあえずそれ、こっち寄越せ」

「そやんな、代わりとかないのに。ムキになって割ってもた。ほんまに申し訳ない。ごめんな」

「……はあ。……もうええわ。……お前がどれだけ謝っても、俺のデータも、この

限定版も、もう戻ってこんのや。……弁償とかそういう話はあとでな。……今、お前の顔も見たくないわ。あっち行け」

「……ありがとう。いや、海翔くん迫真の演技すぎるやろ。最高」

教室の凍り付いた空気が一瞬で解け、生徒たちが「はぁー」と溜息をつく。さっきまでの怒りの表情から一転、いつもの笑顔に戻って、照れくさそうに頭をガシガシ掻きながら海翔が言う。

「えへへ、マジすか？ いやー、先生の『代わりのスイッチ用意させて』ってセリフが、また絶妙に火に油を注ぐ感じで笑笑 つい本気でカッとなってまいりましたわ。演技派俳優って呼んでください！」

「もー！ めっちゃ怖かった！ 私、本気で海翔くんが先生のこと殴るんかと思ってたわ！ 心臓に悪いって、ほんまー！」

「……うん。海翔くん、目が全然笑ってなくて……。私、怖くて息できなかったです……。ロールプレイングで良かった」

「アホらし。……まあ、たかがゲーム機であんだけキレられるんやから、大したもんやな」

「で、これ多分みんな失敗したように見えてるんちゃう？」

「はっ。『失敗したように見える』？ 見えるも何も、大失敗やんけ！ あんたの言う『謝罪サンドイッチ』とやら、海翔に一口も食われんと、顔面に叩きつけられとったぞ。『顔も見たくない』言われて、どこが成功やねん。やっぱ、あんなもん机上の空論や」

「うん、私も失敗やと思う……。だって、海翔くん、めちゃくちゃ怒ったままだもったもん！ 全然スッカリしてへんし、仲直りもできてへんし……。あれやったら、何もしないで逃げたほうがマシやったかも……」

「いや、待て待て。俺は『失敗』やとは思わんで。そら、俺はキレたで？ 限定版やし。でもな、先生がもしあそこで黙ったり『行動』をすっ飛ばして『心からの謝罪』だけしてきたりしても、俺は『口だけか！』ってキレてた。ちゃんと『代わりのスイッチを用意させてくれ』っていう『行動』を示したやんか。俺が感情的すぎて『代わりなんかない！』って突っぱねただけで、先生がやった『謝罪の型』としては、あれで正しかったんとちゃうか？」

「これ、実は僕的に成功してるねん。手応えもバッチリ。ちゃんと『言い訳ソース』も塗ってたやろ？ 気付いた？」

教室中が先ほどよりもさらに大きくどよめく。キレられていた先生が「成功だ」

と言いつつたことに、全員が混乱している。

「はあ!? 成功? アレが? どこをどう見たら成功やねん! 海翔に『顔も見たくない』って言われて、完膚なきまでに叩きのめされとったやんけ!」

「え、え、え、待って! 『言い訳ソース』!? どこにあったん!? 『ごめん』、『代わりのスイッチ用意させて』、『ほんまにごめん』……。え、言い訳なんか一言も言うてへんかったやん!」

「まさか……。先生、謝罪のとき『ムキになって割ってもた』って言うてなかった? 『ムキになって』……。それが『言い訳』じゃね?」

「うわ、ホンマや! 言うてた! 『ムキになって割ってもた』って! うわ、俺、キレて全然気づかんかった! あれが『言い訳ソース』やったんか!」

「『ムキになって』ね。……。あんなもん、言い訳のうちにもらんわ。……。いや、待てよ。だから海翔は、『代わりのスイッチ』って言われたときより、最後の謝罪の方がまだ……。いや、キレてたな」

「いやー、でも先生、なんでアレで『成功』なんですか? 俺、めっちゃキレてましたやん。全然許してへんし、むしろドン引きでしたよ?」

「よく考えてみ。海翔くんさ、限定版やし壊されたことが許せん。でも謝罪はちゃ

んと受け入れられたんじゃない？　もし僕が『ごめん』だけ言いながら壊れたゲーム機を見つめて突っ立ってたらどうやったよ？」

先生のその問いかけに、さっきまで「失敗だ」と騒いでいた生徒たちが、ハッと息をのむ。特に、怒る役だった海翔が、目を見開いて固まった。

「……あ。ホンマやわ。……確かに俺は、限定版が壊れたことには死ぬほどキレた。でも、もし先生が、俺がキレてる前で、ただ『ごめん』『ごめん』言うだけで突っ立っとなら……俺、多分……本気で殴ってたわ。先生が『わりい』って即謝って、『代わりのスイッチ用意させて』って、たとえ間違っても『行動』しようとしたから、俺の怒りは『殴る』やなくて『文句言う』でギリギリ止まってたんや。……うわ、ほんまや。謝罪、ちゃんと受け入れられとったわ、俺！」

「あつ！　そっか。『顔も見たくない』って言ってたけど『殴る』とは言うてへんかったもんな。もし先生が何もせえへんかったら、もっとヤバいことになってたんか……！」

「……そういうことですか。つまり『謝罪三度一致』の『成功』とは、相手に『許される』ことではなく、相手の怒りを『暴力』から『言語』のフェーズに引きずり下ろし、コミュニケーションの土俵に留まらせること……。最悪の事態を回避す

る『ダメージコントロール』としての機能が成功した、と……。なるほど、深いですね」

「……そっか。……一番やつちやいけないのは、怖くて、何もしないで固まっちゃうことだったんだ……。ちゃんと行動で示そうとしたから、海翔くんも、怒りながらも『話』はしてくれたんだね……」

「ほんとでまだ終わりじゃない。『顔も見たくない』『弁償の話は今度』って言ってたけど、実際どう？ 次の日から無視しそう？」

先生のその問いに、クラスの視線が一斉に海翔くんに集まる。海翔は、さっきまでの怒りの演技をすっかり解いて、いつもの笑顔で腕を組み直す。

「あー……。『無視』か。なるほどな。……いや、無視はせえへんと思うわ」

「ええーっ!? あんだけキレてたのに!? 私やったら絶対シカトするわ!」

「そら、次の日も『おはよう、竜二!』みたいにヘラヘラはできひんよ? 笑笑 当たり前やん。でもな『顔も見たくない』言うたんは、あの瞬間に頭に血が上ってたからで、要は『今は話しかけんな、こっちにも頭冷やす時間を寄越せ』って意味やねん。無視したら、弁償の話も何も進まんやん。一番めんどくさいやろ。やから、次の日の朝イチ……は無理でも、昼休みぐらいには、俺から竜二の

席に行って、静かに言うわ。『……で？ 昨日のスイッチ、どないしてくれんねん』って。もう友達の話やない、『事務連絡』やな」

「……はっ。金の無心かよ。一番タチ悪いわ」

「当たり前やろ！ 壊しとんねんから笑笑 でも、そうやってちゃんと『話』ができるのは、竜二が前の日、ちゃんと謝罪サンドをやったからやで。もし竜二が、あの場で突っ立って『ごめん』しか言うてへんかったら、俺は次の日、口も聞かんと先生にチクリに行ってるわ」

「やはりそうですね。『無視』という非生産的な関係断絶を回避し、『賠償交渉』という次の論理ステップに進ませた。先生の『謝罪三度一致』は、やはり成功していったんです」

「そう。ほんで次の『弁償』のフェーズで両者が納得できる案が出た場合。それから実行できた場合。たとえば『限定版じゃなくていいから新しいスイッチのお金を出す』ことになった場合、『まじであのときは悪かった。これで新しいの買ってくれ。ごめんな』って言って渡されたらどう？ 怒り収まるの早くならん？ かなり早いこと『許し』のフェーズが来るんじゃない？」

先生その言葉に、教室の空気が「ああ、なるほど！」という納得に変わる。特

に、怒る役だった海翔が、腕を組みながら深く、深く頷いた。

「あー……、それやわ。めっちゃ早くなると思う。『顔も見たくない』って言うたときの怒りは、まだ『壊された』っていう事実に対するパニックやねん。でも、次の日に事務連絡して、竜二がそこから逃げんと、ちゃんとお金を用意して、もう一回『あのときは悪かった』って頭下げてきたら……そら、もう許すしかないやん。こっちが怒ってんのは『限定版』が壊れたことやけど、それ以上に『俺の大事なもんを雑に扱いやがって』っていう無礼に腹立っとるわけや。でも、ちゃんと弁償して、最後に『ムキになって悪かった』って心から謝ってくれたら、その『無礼』もチャラになる。『こいつ、ちゃんとケジメつけよったな』って。……それしたら、もう怒りはおさまっとるわ。多分そのお金を受け取った瞬間『おう。もうええわ。次からすんなよ』って言うて、終わりやな」

「うわー、凄い！『謝罪サンドイッチ』最強やん！ちゃんと行動でお金払って、最後にもう一回『ごめん』って言葉で挟むんや！それなら海翔くんの怒りも収まるんやな！」

「……ふっ。……結局、金かよ。金で解決すりゃ、大抵のことは許されるってわけだ。……まあ、当然やけどな。金も出さんと『ごめん』だけで済まそうとする奴

が、一番ムカつくしな」

「……良かった……。ちゃんと仲直りできるんですね……。お金だけじゃなくて、最後の『ごめんなさい』があるから、海翔くんも許せるのか……」

「あんなに怒ってた海翔も許してくれる……。最強やん。僕も使えるようになる」

「実は弁償フェーズでも『謝罪三度一致』をもう一回使ってるんよな。①壊した謝罪、②お金で償うという行動、③締めめの謝罪」

「なるほど。『マトリョーシカ構造』ですね。最初の①、②、③の中に、さらに大きな①、②、③が入れ子になっている……。先生、そのメソッド、美しすぎます。

確かに、弁償フェーズも、『壊したことへの再度の謝罪』、『お金を渡すという行動』、『最後の締めの謝罪』で構成されています。完璧です」

「……ちつ。しつこいぐらい謝るってことかよ。……まあ、一回ポツキリよりは、ケジメとしては……マシか」

「いや、違うねん。これは別日やから新たなサンドイッチを用意したんや。もし『弁償とかええわ。今日はちょっとほっといてくれ』やったら一回で終わってるな」

「ああ、なるほど！　そういうことか！　『別日』やから『別サンドイッチ』なん

や！ うわ、先生、用意周到やな笑笑 確かに、俺が『もうええわ、ほっといてくれ』って言うてたら、そこで無理やり『金の話』されても余計キレルだけやもんな。一旦引いて、日を改める。その『間』が大事やったんやな」

「そっか。一日目は『ごめん』って全力で謝って、海翔が落ち着くのを待ってから、二日目にもう一回『お金とごめん』のサンドイッチを渡すんや。確かに、そっちのほうが受け入れやすいかも」

「どう？ めっちゃ難しい内容の謝罪だったけど成功じゃない？」

「いや、先生。ほんま、大成功やと思うわ。俺、あんだだけガチギレしとったのに、最終的に『弁償』っていう事務連絡のフェーズまでちゃんと持っていった。あれ、先生のメソッドがなかったら、絶対無理やったで。ガチで効くって証明されましたやん！」

「……まあ、殴られずに済んで、金の話まで持っていけたんなら、『成功』でいいんじゃないね。知らんけど」

「こんな難題でも有効なんや。もっと軽い場面でも使ってみてな。たとえば『ジュースこぼした』ってとき。『ごめん！』って言って、すぐにこぼしたジュースを拭きながら『服とか大丈夫？ ボーッとして手元見てなかった。ごめん

な』って感じ」

先生のその流れるような実演に、教室中が感嘆の声を上げる。

「おお！ めっちゃスムーズ！ 『ごめん！』、ダッシュで拭く、『ボートとしてたわ、ごめん』これなら、もしこぼされても『もう、しゃあないなあ』って許せる！ 完璧なコンボじゃん！」

「あ、それくらい早い流れなら……私でもできるかも。パニックになっても『まず拭く！』って思えば……」

「行動が早い。……言い訳は後。『ごめん』が、最初と最後。……順番が、大事なんですね」

「言い訳のソースは、塗るなら必ず行動の後、謝罪の前な。無ければより良いけど。ほんならこの辺にしとこか。起立。さようなら」

先生の号令で生徒たちは立ち上がり、声を揃えた。

「さようなら」

生徒たちの顔はまるで一本の映画を見終えたかのように満足気だった。

2時間目 読み物「よだかの星」からの脱線

「じゃあ始めていこか」

「起立。礼」

「お願いします」

「まずは前回のワークシートと今日のワークシート、配っていくわな」

青文字でコメントが書かれたワークシートと真っ白なワークシートが、生徒たちの手元に渡る。

「今日はテキスト17ページ『よだかの星』を使ってやっていこう。今回も宿題で読んできてくれると思うから、まずは感想から聞いていこうかな。読んでみてどうやった？」

「もう、読んでてめっちゃ苦しかった！ 鷹さん、酷すぎひん!? 『市蔵』って名前

に変えろとか、首に札を下げろとか……。理不尽ないじめやん！ よだかくんは何も悪いことしてへんのに、顔が不細工ってだけであんなに言われるなんて、あんまりやわ……」

「……私は、読んでて胸がギュッてなりました。よだかが自分の顔を見て『味噌をつけたようで、口は裂けてる』って思うところ……。誰からも嫌われて、生きとるだけで『申し訳ない』って思ってしまう気持ち、なんか痛いぐらい分かって……。最後、星になれて良かったねって思う反面、そこまで追い詰められなアカンかったんかなって、切なかったです」

「はっ、くだらん。名前変えろ言われたくらいで死ぬとか、メンタル弱すぎやろ。俺なら『市蔵』でも何でも変えたフリして、裏で鷹の寝首かいたるけどな。だいたい、自分が弱いからナメられるねん。『星になって燃え尽きました』って美談っぽく終わっとるけど、要は現実逃避して自殺しただけやんけ。何の解決にもなってへんわ」

「俺は、よだかが可哀想すぎて見てられへんかったなあ。鷹だけじゃなくて、ヒバリとか他の小鳥まで悪口言うてるやろ？ 集団で寄ってたかって弱いもんいじめしてる図が、今の学校とかネットとかと重なってしんどかったわ。でも、最後の

星になるシーンは、悲しいけど……すごく綺麗やったな」

「僕も、景色とか色の描写がすごく綺麗やなって思った。夜空の青黒い感じとか、山焼けの赤い火とか。よだかが空を飛んでるときに、息が白く凍ったり、霜が剣みたいに刺さったりする感じ……。読んでて、肌がチクチクするみたいに寒くて、でも最後は青い光になって燃えるんやろ？ 映像で見たいなって思った」

「鷹の要求は理不尽極まりないですね。名前を変えろという命令に法的拘束力はありませんし、脅迫罪が成立します。ただ、よだかも『羽虫を食べるのがツライから死ぬ』というのなら、そもそも自然界の食物連鎖を否定することになります。そこに悩み始めて自殺を選ぶのは、生物としてのプログラムがバグっているとは思えません」

「……僕は、その『バグ』こそが、よだかの優しさだったんじゃないかなと思います。生きるために虫を殺さなきゃいけない。そのことに背中がぞつとしたり、泣き出したりしてしまう。自分が生きていること自体が『罪』だと感じてしまった苦しみが、すごく重く響きました。誰も傷つけない場所に行きたかった……、その切実な祈りがあの青い光だったのになって」

「今回もなかなか重いお話やったよな。今日は『いじめ』周辺を掘り下げてみ

よか」

先生は真剣な眼差して生徒たちを見回す。

「ほなら、一旦みんな目え瞑って顔伏せてか。周り見るとか無しで、自分の気持ちに正直になってな。じゃあまずは『なんやかんや言うて、このクラス好き、みんなに会うのが楽しみ』って子は静かに手を挙げて」

教室に一瞬の静寂が流れる。衣擦れの音がして、何人かの手が挙がる。

陽奈と海翔は高く真っ直ぐに手を挙げており、純平も自然な様子で挙げている。

大輝と美緒は、少し躊躇いながらも、おずおずと控えめに手を挙げた。一方で、拓也はピクリとも動かず、背筋を伸ばして座ったまま。竜二はふん、と鼻で笑うような気配を残し、腕を組んだまま身じろぎもしない。

「おっけ、ありがとう。ほんなら今度は一旦みんな手を挙げてもらって。顔は伏せたままな。『学校に行くのが億劫やな、なんか行きたくないな…』って感じたことがある子は静かに手を下ろしていつてか」

静寂の中で衣擦れの音が重なった。

71
真っ先にストンと手を下ろしたのは美緒と大輝だった。迷いは一切ない。続いて、竜二が乱暴にバサッと手を下ろす。純平も、音を立てずにそっと手を下ろし

た。陽奈は空中で手を少し迷わせたが、ゆっくりと手を下ろした。

教室に残った腕は二本。

拓也は指先までピンと伸ばしたまま、微動だにしない。海翔もまた、真っ直ぐに天井に向けて手を挙げ続けている。

「ありがとう。いま手を挙げてくれてる子は、自信持ってそのまま挙げててな。みんな周り見てみて」

生徒たちは恐る恐る目を開け、キョロキョロと周りを見渡す。

「えっ!? たった二人!? 私だけかと思ってドキドキしとったのに、みんなそんなやん! なんかめっちゃ安心したかも……」

「はっ。見ろや、このザマ。ガリ勉メガネと脳内お花畑の人気者、このツートップだけかい。おめでたい頭しとるわ。あとの連中は全員『行きたくねえ』って思ってるのが現実じゃ。綺麗事抜きならこんなもんやろ」

「ええっ、マジか……! 拓也は分かるけど、陽奈まで手え下ろしてたん!? お前、いつも楽しそうやんか。俺、完全にマイノリティやん……。なんか逆に自信满满的に挙げてるんが恥ずかしなってきたわ!」

「みんな、どんなときに学校に来るのが億劫になる?」

「朝起きて、布団から出る瞬間がもう億劫やねん。眠いののに無理やり起こされて、学校来たら来たで『ボタン留めろ』だの『スマホしまえ』だの、いちいちうるさいんじや。管理されるんが一番鬱陶しいねん。ここにおるだけで息が詰まるわ」

「私は……たとえば、体育とか発表とか、自分が失敗してしまいそうな授業がある日です……。『また変なことしちゃうかも』とか『みんなに笑われるんちゃうかな』って悪い想像ばかりしてしまって……。考えすぎかもしれへんけど、そう思うと家の玄関を出るのが、すごく怖くなります」

「えー、私は基本学校好きやけど……！ でも、友達とラインでちょっと喧嘩した次の日とかは、めっちゃ足重くなるなあ。『今日無視されたらどうしよう』とか『グループ入れてもらえへんかったらどうしよう』とか考えすぎて、胃がキリキリするもん。勉強とかより、やっぱ人間関係がギクシャクしてる時が一番しんどいかなあ」

「僕は、クラスの空気が悪いときかな。誰かが誰かの悪口言うてたり、誰かが怒られてたりするのを見るのが苦手で……。自分のことじゃなくても、そういうピリピリした空気の中にいるだけで疲れちゃうっていうか。『あー、平和な家で寝たいなあ』って思うわ」

「……理解に苦しみますね。人間関係や気分の問題で、本来の目的である『学習』を放棄したくなるというのは、優先順位が間違っています。学校は勉強をしに来る場所であって、他人の顔を窺いに来る場所ではないはずです。タスクをこなすのに、感情を持ち込むから億劫になるんじゃないですか？」

「みんな、誰しもそういうことあると思うねん。先生ですら億劫になることあるもん。雨の日とかもそうやし、今日も億劫やったよ。だって、こんな重いテーマの授業、みんなに上手く刺さるようにできるか不安やもん」

「ええっ!? 先生でもそんなこと思うん!? なんか意外やけど……めっちゃ安心したわ。大人でも先生でも、不安になることはあるんやね。『行きたくないな』って思うのが私らだけちゃうって知れただけで、なんか今日はもう十分収穫ありって感じやわ!」

「……先生も、不安になるんですね。私、先生はいつでも自信満々に教壇に立っているとってました。……でも、その話聞いて、ちょっとだけ気が楽になりました。先生ですらそうなら、私が発表とかで怖くなるのも、弱さじゃなくて『普通のこと』なんかって……」

「はっ。職務放棄やんけ。給料もろとる分際で『行きたくない』とか、社会人とし

てどうなん？ ……ま、ええけどな。『みんな学校大好きでしょ！』みたいな寒い嘘つかれるよりは、よっぽど信用できるわ。人間、そんなもんやろ」

「……教師が生徒に向かつて『授業が不安』と吐露するのは、プロフェッショナルとしていかなものでしょうか。生徒に余計な動揺を与えるリスクがあります。……ですが、先生が完璧なマシーンではないという事実は、ある意味で『先生も人間である』という前提条件として頭に入れておきます」

「先生も人間やで。特に竜二くんに詰められるのとか怖くて想像するだけでも堪えられへん笑笑」

「はあ!? 俺のせいだよ！ 冗談きつついわ。俺はただ、先生が隙だらけやから論理的に矛盾突いとるだけやんけ。それを『怖い』とか心外やな。……ま、俺にビじるくらいの危機管理能力があるなら、教師としては及第点かもしれないけどな」

「あはは！ 先生、正直すぎ！ でも分かるわ。竜二のあの『はっ』っていう鼻笑い、夢に出てきそうやもんね。先生でもビビってるんやと思ったら、僕も竜二のツツコミをエンタメとして楽しめるようになるかも」

「……教師が生徒一人を『恐怖の対象』として名指しするのは、教育的指導の観点からバランスを欠いています。ですが、それによってクラスの緊張が緩和された

という事実もまた、認めざるを得ません。……計算づくの発言だとしたら、先生もなかなか食えませんか」

「拓也くんもなかなか言ってくれるやん、燃えるわ。教育的指導の観点からバランスを欠いているって言うけど、もちろん全部計算の上やで。竜二くんを出したのは、このクラスにおいては冗談で済むことが分かってるから。ここで拓也くんの名前を出したら『ガチで怖がってる感』があって、冗談って思われへんやろ？」

「……心外です。僕は常に校則と論理に基づいた正論を述べているだけで、他者に威圧感を与えているつもりは毛頭ありません。それを『怖い』などと評するのは、教師としての指導力不足を棚に上げた責任転嫁ではありませんか？ ……それに、僕の名前が出たら『冗談にならない』というのはどういう論理ですか。僕はいつだって冷静に会話できます」

「はっ、効いとる効いとる。凶星突かれて早口になっとるで。要はお前、煙たがられとんねん。『あいつの名前出すと空気凍るからやめとこ』ってな。俺はまだ愛嬌のある『イジれるヒール役』やけど、お前は『触れちゃいけない聖域』扱いなんじゃ。ドンマイやな」

「あはは！ 先生、それめっちゃ分かるかも！ 竜二くんには『もー！ 何言って

んの!』って言い返せるけど、拓也くんに『……で?』って詰められたら、そこで会話終了しちゃいそうやもん! でも『ガチすぎて冗談にならん』って、ある意味最強のキャラやんね!」

「拓也、そんなムツとした顔すんなって笑笑 でもまあ、先生が『竜二は冗談通じるけど拓也は怖い』って判断したのは、俺もナイス判断やと思うわ。拓也イジつたら、来週の学級会とかで詰められそうやもん」

「論理だけじゃ生きづらい。逆に、感情だけじゃ生きていけへん。論理と感情のバランスが大事なんや。前回やったやろ? 言葉と行動のバランス。論理と感情も同じ。ちなみに僕は論理武装型の感情派。普段はみんなに共感するけど、スイッチ入ったら論理で詰めてしまうかもしれないから、くれぐれもご注意ください」
「はっ。『論理武装した感情派』やと? なんやその矛盾した中二病みたいな肩書きは。ま、ええわ。スイッチ入って論理で来るなら望むところやで。俺がその『武装』ごと論破したるから、覚悟しときや。先生が涙目で『参りました』言うまで詰めたるわ」

「……なるほど。感情がベースでありながら、自己防衛や説得の手段として論理を用いるということですね。前回の『言葉と行動のバランス』の話とも通底しま

す。ただ、感情が暴走したときの論理ほど厄介で扱いにくいものではありません。先生、スイッチが入ったときこそ、その『武装』が暴発して生徒を傷つけないよう、自制をお願いしますよ」

「あはは！ 『武装』って響きがなんか強そう！ でも分かるかも。先生、普段は『うんうん』って優しく聞いてくれるけど、たまに目がマジなときあるもんね、さっきの拓也くんとこのやりとりのときも。私も感情だけで突っ走って失敗すること多いから、その『論理の鎧』の着方、ちょっと教えてほしいかも。バランス大事やもんね！」

「……『論理で武装する』……。なんか、すごくしつくりきました。私、いつも感情だけで動いて、傷ついたり失敗したりしてばかりだから……。自分の弱い心を守るために、言葉とか理屈を覚えることも大事なんやって、今すごく思いました……。先生みたいになれたら、もう少し生きやすくなるのかな……」

「話が逸れてもうたな、無理やり戻そか笑笑 みんな億劫に感じることはあっても、頑張つて来とるよね。それはみんなの強さやと思うで」

「……『強さ』……ですか？ 私、学校に来るだけで精一杯で、みんなみたいに上手く喋れへんし、自分は弱い人間やってずっと思っていました……。でも、先生に

そう言ってもらえると……なんか、今日ここに來れた自分を、ちょっとだけ褒めてあげてもええんかなって……少しだけ思えます」

「はっ、安い慰めやな。別に『強さ』なんかちゃうわ。サボったら親がうるさいし、あとあと面倒くさいから惰性で來とるだけや。それを『頑張ってる』とか『強さ』とか美化されると、逆に冷めんねん。当たり前のことを凄そうに言うなや。子ども騙しもええ加減にせえよ」

「えへへ、なんか照れるなあ！ でも嬉しい！ 私、朝とか『無理ー寝てたいー』ってグズグズしちゃうけど、それでも制服着てここに來ただけで『偉い！』ってことやんね？ 先生にそう言われると、なんか明日からも頑張れる気がするわ！ 単純かもしれないけど笑笑」

「……先生の仰ることは情緒的には理解できますが、論理的には疑問です。登校は生徒の『義務』であり、契約の履行です。マイナスの感情を押し殺してタスクを遂行するのは、社会生活を送る上で当然のスキルであって、特筆すべき『強さ』ではありません。当たり前前の基準を下げて甘やかすのは、教育上いかなものではないでしょうか」

「おっしや、決めた。今日は寄り道いっぱいすつぞ！ みんな、義務教育って生徒

が学校に来るのは義務？」

「……先生、それは引っかけ問題ですか？ それとも単純な知識不足ですか？ 憲法に基づけば、義務教育における就学の『義務』を負うのは『保護者』です。子どもが負うのは義務ではなく、『教育を受ける権利』です。つまり、生徒が学校に来るのは『義務』ではありません」

「はっ、聞いたか？ 『権利』やて。権利なら行使しようが放棄しようがこっちの勝手やろ。『学校に来るのは義務！』とか偉そうに言うてる大人たちは、詐欺師みたいなもんやな。俺らが学校に行かんでも、法的には何の問題もないっちゅうことや。先生、今の気分はどうや？ 生徒に論破されて」

「ええっ、そうなん!? 私『義務教育』って言葉の響きだけで、てっきり『絶対に行かなあかん』とずっと思ってた！ 私らが『権利』持ってる側やったん？ なんかそれ聞いただけで、ちょっと偉くなった気分やわ」

「……権利。その言葉を聞いて、なんか肩の荷が下りました。僕も『行かなあかん』と思えば思うほど苦しかったけど『行く権利がある』って言われると……それは自分で選んでいいものなんやって、少しだけ息がしやすくなる気がします」

「そうや。義務教育は、受けさせる側の義務やねん。生徒は義務じゃなく権利。つ

まり、今日は気分が乗らないから休む、とかはまったく問題ないのよ。もちろん授業はその分進んじゃうけどね」

「はっ、言質取ったで。聞いたかみんな。『気分が乗らんから休む』はまったく問題ないんやて。ほな、明日から俺が来んでもいちいち家に電話してくんなよ？

『権利』を行使して休んだだけやからな。先生らが『来い来い』言うのは俺らの権利侵害やろ。訴えるぞ」

「……先生、それは暴論です。法的に『処罰されない』というだけであって、『問題ない』わけではありません。授業が進むというデメリットがある以上、気まぐれで権利を放棄するのは合理的ではない。学ぶ権利を行使するためには、登校するというプロセスが不可欠です。『休んでもいい』と甘やかすのは、長期的には生徒の不利益になります」

「うわぁ……先生、今の言葉、すごい斬新やわ！ 『休む』のは『サボリ』やから『悪』って刷り込まれてたけど、そう言われると……なんか、学校に来るのが『義務』じゃなくて『自分の選択』なんやって思えてくる。強制労働させられてるんじゃないくて、自分で選んでここに来てるって思ったら、なんかちょっとだけ足取り軽くなるかも」

「……『問題ない』……。その言葉を聞いて、なんか胸のつかえが取れました……。しんどいときは休んでもいい、自分を守ってもいいんやって……。そう思えるだけで、逆に『じゃあ、僕も行けるときは行こう』って思えるのが不思議です。逃げ道があるって分かってるほうが、人は強くなれるのかもしれない……」

「そうや。あくまでも自分の選択であって自己責任や。生徒の不利益になろうが、それは自己責任やで。学びたいなら来たらいい。来ないのなら、進んでも文句は言えない。そういうもんや」

「はっ、ドライやな。でもその『突き放し』は嫌いじゃないで。変に『あなたのため』とか恩着せがましく言われるより、よっぽど誠実や。『やるもやらんも自己次第、垂れ流したクソは自分で拭け』……。シンプルでええやんけ。俺はそっちのが性に合うわ」

「……『権利の行使には責任が伴う』。非常に明快なロジックです。感情論で『来てください』と懇願されるより、損得勘定で『来なければ損をするのは君だ』と提示された方が、僕としても行動の指針になります。自己責任という契約なら、僕は僕の利益のために登校を選択します」

「先生、急に冷たいな！笑 笑 『文句は言えない』って言われると、なんかプレッ

シャー凄いわ。でも、そう言われると逆に『行ったらやないか』って気持ちになるから不思議やな。誰かにやらされてるんじゃないやなくて、自分のために勉強しに来てるんじゃないな」

「……『自己責任』。その言葉は、冷たく聞こえるけど……本当はすごく、僕らを信頼してくれてる言葉なんかなって思います。子ども扱いして管理するんじゃないやなくて、一人の人間として『どうするか自分で決める』って託されてる気がして……。自由やけど、その分、背筋が伸びる思いです」

「うん。自由には責任が伴う。自分の選択の結果は人のせいにしない。それが自分の選んだ道なんやから」

「けっ。まあええわ。そのほうがスッキリする。他人のせいにできへんってのはキツいけど、逆に言えば誰にも文句言わせへんってことやろ？ 俺の人生のハンドルは俺が握る。事故っても俺の責任。……上等やんけ」

「うわ、なんかドラマの決め台詞みたいでカッコよかった！ 笑笑 『自分の選んだ道』か……。そう言われると、嫌な勉強も『自分が選んでやってる冒険』みたいに思えてくるかも？ 責任重大やけど『主人公は私！』って感じで、悪くないね」

「……『自分の選んだ道』……。その言葉、ズシツときますね。人のせいにできな

いって、すごく怖いことだと思います。でも……『よだか』も、最後に星になる道を選んだのは自分自身でしたもんね……。苦しくても、自分で決めたことなら、納得できるんじゃない嘛せん……」

先生は小さく息を吐き出し、息を整えた。

「さて、どうする？ 寄り道したからいじめから遠ざかったけど、戻る？ 笑笑」

「……愚問ですね。当然、戻るべきです。ただでさえ冒頭のアンケートと権利義務論争でタイムロスが発生しています。これ以上『寄り道』を続けるなら、学習指導要領に基づいた授業進度の遅れは免れませんよ。先生、自己責任論を説くなら、まずは先生自身が計画通り授業を進める責任を果たしてください」

「はっ。戻らんでええわ。どうせ『いじめ』の授業なんて、『いじめはダメ絶対！』

『みんな仲良く！』とかいう綺麗事を垂れ流すだけの茶番やろ？ そんな退屈な説教聞かされるくらいなら、さっきみたいな『学校来なくてもいい』っていう過激な雑談の方がよっぽど教育的価値があるわ」

「拓也くん真面目すぎ！ でも竜二の言う通り、いじめの話って聞くだけで気分重くなるもんね……。でもさ、先生が『よだかの星』選んだってことは、ただの『ダメ絶対』じゃ終わらへん氣もするんよね！ せっかくやし、先生流の『いじ

め論』聞いてみたいかも！ 戻ろ戻ろ！」

「……私は……いじめの話に戻るのは、正直ちょっと怖いですが……。でも、さっき先生が『億劫でも来ることが強さ』って言ってくれたから……。逃げないで、ちゃんと聞いてみたいです。よだかがあんなに苦しんだ意味、ちゃんと考えたいから……」

「今日は拓也くん回やな。『学習指導要領に基づいた遅れ』って言ったな？ でも、僕は遅れてへんぞ？ 寄り道しながら大事なことを『学習指導要領に基づいて』授業してる」

先生は教卓から学習指導要領解説を取り出し、付箋の貼られたページを開いて拓也に手渡す。

「いま自由と責任って話したよな？ 内容項目のA(1)、なんて書いてある？」

「……これは……」

拓也は、先生から渡された学習指導要領解説のページに目を落とし、少し眉をひそめながら、しかしハッキリとした声で読み上げた。

「……内容項目A(1)『自主、自律、自由と責任』。……『自律の精神を重んじ、自主的に考え、判断し、誠実に実行してその結果に責任をもつこと』……」

読み終えた拓也は、ふう、と小さく息を吐いてメガネの位置を直した。

「……なるほど。先ほどの『学校に来るかどうかは自分の権利であり、その選択の結果としての授業の遅れなどは自己責任である』という議論……。完全にこの定義に合致していますね。……先生、一本取られました。寄り道に見せかけて、最も重要な『自由と責任』の本質を実体験として学ばせる……。その手腕、認めざるを得ません」

「はっ！ マジかよ。今の過激なトークが『教科書通り』やったってことか？

『休んでもええけど自己責任な』ってのが、お国が定めた『道徳』やって言うんか……。傑作やな！ 文科省もたまには粹なこと言うやんけ。先生、あんた詐欺師の才能あるで。俺ら、完全に手の平の上で転がされとったわ」

「凄い！ 私、ただの雑談やと思っつてめっちゃ楽しんだのに、それも授業やったん!? 『自主的に考えて判断する』……。確かに私ら、さっき『自分で行くか行かんか決めるんや!』ってなったもんね！ うわぁ、なんか騙された気分やけど、悪い気さえへんわ。るい先生、策士すぎ!」

「……『自主的に考え、判断し、誠実に実行してその結果に責任をもつ』……。言葉にすると難しいけど、さっきの話だとすごくスツと入ってきます。……先

生は、最初からこのページを開かせるつもりで、あえてあんな話をしたんですね……。僕たちが『自分で考えた』って思えるように……。……凄いな」

「最初の授業でも言うたけど、僕はみんなに気持ち良く過ごしてもらいたいんや。ときには衝突することもあるやろうし、納得できひんこともあるかもしれない。でも僕はみんなになんとか大事なことを伝えて、成長してもらいたい。そのため僕はこの道徳の授業をめちゃくちゃ準備してる。もちろん学習指導要領も読み込んで。だからこそ寄り道しても、予定とは別の大事なことを伝えられるんや」

「……参りました。そこまで緻密に計算された上での『アドリブ』だったとは……。学習指導要領を読み込み、どんな方向に話が逸れても、必ず『学び』に着地させるだけの準備……。そのプロフェッショナルリズムには、敬意を表さざるを得ません。僕の『遅れている』という指摘は、あまりに短絡的でした。……撤回して謝罪します」

「はっ、熱いねえ。『めちゃくちゃ準備してる』って自分で言うあたり、相当な自信家やな。まあ『証拠』を突きつけられたら、ぐうの音も出んわ。適当に教科書読んで時間潰すだけの教師が多い中でそこまで準備してくる執念、嫌いじゃない

で。その『本気』に免じて、今日の授業は最後まで付き合ってやる」

「……先生……。私、道徳の授業って、いつも『答えが決まってる退屈な時間』やと思ってました……。でも、先生が私たちのために、見えないところですごく準備してくれてたって聞いて……。……『成長してもらいたい』って言葉、すごく温かったです。私たちのこと、そんなに大切に思ってくれてるんやって……。なんか、胸がいっぱいになりました……」

「凄えな……。俺、感動したわ。先生のその『熱量』ビンビン伝わってきたで！衝突してもいい、納得できなくてもいい、でも成長してほしいって……。それ、マジで俺らのこと考えてくれてる証拠やん。先生がそこまで本気なら、俺らも本気で返さな男が廃るわ。先生の『めっちゃくちゃ準備した授業』全部受け止めるで！どんと来い！」

「なんか熱くなってもたな……。恥ずかし笑笑 時間もあんま無いから、よだかの星は次回に送ろう。今日は残り雑談みたいなことやろ。みんなMBTIって知ってる？」

先生の問いかけを聞いて、生徒たちはタブレットでMBTIを検索する。

「知ってる！ 私それめっちゃ好き！ 今ネットで流行ってるやつやんな？ いき

なりトレンド放り込んどくとか、先生さすがやね！」

「……ユングのタイプ論をベースにした性格検査ですね。学術的な信憑性や妥当性については、心理学の専門家からも疑問視する声が多い指標です。所詮はバーナム効果を利用した、現代版の血液型占いのようなものでしょう」

「はっ。何やそのアルファベット四文字は。……あー、インスタとかで騒いどるやつか。くだらん。人間を型にはめて『お前はこういう奴や』ってレッテル貼って、何が楽しいんや。俺は俺や。アルファベットごときに俺の何が分かるねん。そんなもん頼らな他人と喋れんのか、お前らは」

「……あ、私……知ってます。……夜中に一人でやってみたことあって……。『INFP』って出たんですけど……。解説読んだら、なんか『私のこと見た？』ってくらい当たってて、ちょっと泣きそうになりました……。自分だけじゃないんやって思えて、そのときは少し救われたというか……」

「そうそう。E/I、S/N、T/F、J/Pの組み合わせ、全16通りで分類される。これ、MBTIで人を判断するのは良くないけど、ざっくりしたタイプを考えるにはめちゃくちゃ役に立つと思う。たとえば美緒さん。僕もINFPだから分かるんだけど、どうでもいいことで悩みすぎちゃって、自分でも無駄って自覚

してるのに悩み続けちゃうとかない？」

「……あ、はい！　すごく分かります……。寝る前とかに、『あんなこと言わなかったらよかった』とか『あのとき相手はどう思ったやろ』とか……。もう終わったことやし、考えても仕方ないって頭では分かってるんですけど……。心臓がギュッてなって、どうしても止められなくて……」

「はっ。アホちゃうか。『無駄って自覚してるのに悩み続ける』って、それただの自傷行為やんけ。解決策考えるならまだしも、答えの出んことをウジウジ考える時間があつたら寝た方がマシやろ。俺なら、どうにもならんことは『知らんがな』で秒で切り捨てるわ」

「えーっ！　先生も美緒ちゃんと同じINFPなん？　凄い！　運命やん！　でも分かるかも。先生の授業ってなんか優しいし、美緒ちゃんもフワッとして癒し系やもんね。『悩みすぎちゃう』のはしんどいかもしれんけど、その分、人の痛みが分かるってことやん？　私は二人のそういうところ好き！」

「非効率ですね。『悩む』という行為は本来、問題解決のための思考プロセスであるべきです。解決不能、あるいは無意味であると結論が出ている事象に対して、脳のリソースを割き続けるのは、メモリの無駄遣いであり、システムのエラーのよ

うな挙動です」

「拓也くんは見てる感じ多分ISTJじゃないかなって思うんよ。論理ベースで判断を下して、感情を持ち込むことは無駄だと感じるタイプ。自分の中のものさしに合わないものは避けがちやと思う」

「……『ISTJ』……ですか。アルファベットの羅列や占いのような分類には興味がありませんが、先生の分析自体は否定しません。感情で判断軸がブレるのは、システムとして不安定であり、非合理的です。ルールや基準は、集団生活を円滑に回すためのプロトコルですから、それに従わないものを『エラー』として排除するのは、当然の帰結です」

「はっ、大当たりやんけ。『自分の中のものさしに合わないものは避ける』……その通りすぎて笑えんわ。こいつのものさしは鉄製でガチガチやからな。融通なんか一ミリも利かん」

「うわぁ！ めっちゃしつくりくる！ 拓也くん、いつも『それは校則違反です』とか『時間は守りましょう』とか、コンピューターみたいに正確やもんね」

「……『感情を持ち込むのは無駄』……。……私には、絶対にできない考え方です……。でも、だからこそ拓也くんは、いつも迷わずに『正解』を出せるんです」

ね……。感情に振り回されて、いつもグルグル迷子になってる私からすると……その『揺るがない強さ』を持っているのが、少しだけ……羨ましいです……」

「二人は割と真反対だね？　でも美緒さん、見て？　僕、拓也くん相手に論理振りかざしたでしょ？　でもそれは決してT型だからじゃない。バチバチのINFPだけど、成長して超論理武装した結果なの。感情だけじゃしんどすぎる。その心を守って自己主張するための武装や」

「……そういうことだったんですね。私、自分の性格が弱くて、ダメなものやと思ってきました……。『直さなきゃ、変わらなきゃ』って……。でも、先生は『INFPのままでもいい』って言うってくれるんですね。優しさを捨てるんじゃないかと、それを守るために『言葉』や『理屈』を身につける……。それなら……私にもできるかもしれません……」

「……なるほど。OSは『感情』だが、アプリケーションとして高度な『論理』を後付けでインストールしている、という解釈ですか。……非常に興味深いですね。先生が時折見せる、感情的な熱量と、僕をも論破する冷徹な論理性。その『矛盾』の正体がやっと分かりました。……感情ベースの人間が論理を武器にする、というのは、ある意味で最強の『対人インターフェース』なのかもしれません」

「はっ、『超論理武装』か。中二病もそこまで突き抜けると立派な戦術やな。……ま、ええんちゃう？ 裸で戦場歩いて『痛い痛い』泣いとる奴より、鉄板一枚でも着込んで『掛かってこいや』言うとる奴のほうが、俺はまだ話聞く気になるわ」
「かつこいいい！ 『超論理武装したINFP』って、なんかアニメの主人公の覚醒フォームみたいやん！ 美緒ちゃん、聞いた？ 美緒ちゃんは『弱い』んじゃない、まだ『装備』を集めてる途中ってことやね。るい先生っていう最強の師匠がおるんやから、これからレベルアップし放題やん！」

「僕の主観で勝手に決めつけるけど、美緒さんINFP、拓也くんISTJ、陽奈さんENFP、海翔くんENFJ、竜二くんISTP、大輝くんはINFP、ほんで純平くんはISFPって感じかな」

「うわっ！ 先生、なんで分かんのか!? 鳥肌立ったわ。私ENFPで、海翔くんがENFJって、まさに『似てるけどちょっと違う』黄金コンビやん！ 大輝くんのINFPJとかも分かるわ。先生、占い師にもなれるんちゃう？」

「……INFP……。人当たりはよく見えるけど、本当は頑固な理想を持ってて、なかなか人に心を開かない……。……凶星すぎて、ちょっと怖いくらいです。純平くんのISFPがマイペースで平和主義なところも、そのまんまですね」

「はっ。ISTPだあ？『巨匠』とかって書いてあるけど、要は『職人氣質の一匹狼』ってことか。……フン、悪くはないな」

「……ISTJ、『管理者』。……責任感が強く、事実と論理に基づき、秩序を守る。……否定する要素が一切ありませんね。それが僕の行動原理そのものですから。血液型占いのような根拠のない分類は嫌いですが、この分析に関しては、僕のアイデンティティを正確に言語化していると認めざるを得ません。先生の観察眼、侮れませんか」

「僕が話してて特に落ち着くのは海翔くんとか純平くんやな。HPとかメンタルが回復する感じ。美緒さんもそうやってたりする？」

「……はい、すごく分かります。……海翔くんと話していると、私がどんなにウジウジしてても、否定せずに『それも美緒のええところやん！』って明るく変換してくれるから……。なんか、暗い部屋に窓を開けてもらったみたいに、心が軽くなるんです……」

「えっマジで！俺、そんな『歩くパワースポット』みたいな効果あったん？でも、先生と美緒ちゃんのHP回復できてるなら本望やわ！俺、特に何も考えてへんけど、二人が笑ってくれるなら、これからも全力でポジティブビーム出す

で！笑笑」

美緒は少しはにかみながら、隣の席の純平にも視線を移す。

「……純平くんは、無理に喋らなくても、ただ隣にいてくれるだけで……なんか空気が柔らかいっていうか……。森の中で深呼吸してるみたいに、すごく落ち着きます。……私にとって二人は、本当に『回復スポット』みたいですよ……」

「僕なんか、ただボーッとしてるだけやけど……。でも、先生らがしんどくないなら、それが一番ええわ。僕も、先生や美緒ちゃんと話すの、のんびりしてて好きやで。無理せんでええから、楽やわ」

「はっ。お前らRPGごっこかよ。めでたいパーティやな。……俺はパスや。そういう『優しさの押し売り』みたいなキラキラした空間におると、逆にHP削られんねん。俺にとっては毒沼やわ。……まあ、せいぜい傷の舐め合いして回復しとけや」

「MBTIがすべてっていうわけではない。もちろん、美緒さんと僕みたいに、一見するとまったく違う人も居る。個人差があるから。でも考え方や感じ方の傾向は似てたりするのよね。それで何が言いたいかというと、極端は生きづらいよってこと。論理Tだけでは人生つまらんし、感情Fだけじゃ自己満足の領域を抜け

れない。直観Nだけでは目の前のことに疎くなるし、感覚Sだけでは裏に広がる可能性に気付けない。僕の授業を通していろんな考え方に触れることで、自分の苦手な部分も装備を身に着けて、自分らしく最強を目指してこ」

「はっ『最強』か。……ええ歳した大人が少年漫画みたいなこと言うて恥ずかしげもないな。……でもまあ、否定はせん。『論理だけじゃつまらん』ってのは、確かにそうかもしれん。機械みたいに正確なだけで、遊びのない人生なんてクソ喰らえやからな。俺の『武器庫』を充実させるためなら、この授業、利用したってもええで」

「……『感情だけじゃ自己満足』……。痛いけど、その通りだと思います。私、可哀想って泣くだけで結局何も解決できてないこと、いっぱいあったから……。装備、身につけたいです」

「……『感覚だけでは裏に広がる可能性に気付けない』。……耳が痛いですね。僕は目の前の事実とルールに固執するあまり、裏にある『学習指導要領に基づく先生の意図』に気付かず一本取られました。自分がない『直観』や『感情』のロジックも、バグだと言わずに解析する必要があるそうです」

「なんかワクワクしてきた！ 私、直感と感情で生きてるから、拓也くんの『計画

性』とか竜二くんの『冷静さ』を装備したら、マジで無敵になれるってこと？
よっしゃ！ このクラス全員でレベルアップして、最強のパーティ目指そー！

「それでいうと、このクラスって既にある意味最強なんよ。最初の授業で『自分とは違う意見を聞いたとき、そんな考え方もあるんか、って思ってたほしい』って言ったの覚えてる？ あれをこのクラスでやってみ。論理も感情も感覚も直観も伸ばし合えるやろ？ こんなクラス滅多に無いで」

「そういうことかあ！ 私、今まで自分と違う意見の人って『合わへんわー』って避けてたけど、それじゃ『装備』集まらへんってことやね。竜二くんの毒舌も、拓也くんの小言も、私のパーティに必要な『レアスキル』やと思えば……なんか急に愛しくなってきたかも！ 先生、このクラス推せるわ！」

「はっ、気持ち悪いこと言うなや。『愛しい』とか寒気がするわ。……ま、でも理屈は通つとる。俺の視界に入らんもんが見えとる奴がおるなら、高性能なセンサー代わりに使うんは悪くない。……『最強』かどうかは知らんが、使える手駒が揃つとるなら、利用価値はあるクラスやな」

「……『相互補完』ですね。組織論としても、同質的な人間が集まるより、異質な能力を持つ人間が混在するほうがリスクヘッジに強くなります。感情論に流され

そうなときは僕がブレーキをかけ、僕が理屈で凝り固まったときはあなたたちが『遊び』を作る。……機能的なクラスであることは認めましょう」

「……『違う意見』が、自分を助けてくれる……。私、誰かに反対されるのがすごく怖かったけど……それは私を否定してるんじゃないくて、私にない『視点』をくれてるだけなんですね……。そう思ったら……このクラスにいるのが、すごく心強く思えてきました……。私、ここにいてもいいんですね……」

「ほんで、このクラスの大半はNF型とST型やな。なかなか分かり合うのは難しい。そこで純平くん！ 出番や！」

名指しされた純平は目を丸くして、のんびりした口調で首を傾げる。

「えっ、何……、僕？ えっ？」

「……なるほど。純平は『感覚S』と『感情F』を併せ持っています。つまり、僕や竜二のような『ST型』の現実的な捉え方も理解でき、かつ、美緒さんや陽奈さんのような『NF型』の情緒的な感性にも共感できる。……両陣営の言語を翻訳できる『通訳者』のポジションですね」

「はっ。このカピバラみたいな顔した奴が『通訳』やと？ 笑わせるな。こいつは単に、どっちつかずでフラフラしとるだけやろ。……まあでも、こいつにキレル

気にはならんのも事実やな。毒にも薬にもならんというか、暖簾に腕押しというか……喧嘩するだけ無駄って感じや」

「あはは！ それ褒めてるん？ でも分かる、純平くんって、拓也くんが難しい話してても『ふーん、凄いなー』って聞いているし、私らが夢みたいな話してても『楽しそうやなー』ってニコニコしてるもんね！ どっちも否定せえへんの、ある意味最強のスキルかも！」

「……えー、そんな大層なもんちゃうけど……。んー、なんて言うか……。拓也の言う『ルール』も大事やなっと思うし、美緒ちゃんが『心が痛い』って言うのも、痛そうやなっと思うし……。どっちかが間違ってるんじゃないかって、どっちもあるんちゃうかなって」

「正直、僕が拓也くんを説き伏せてたあたりから興味薄れてたやろ。『なんか難しい話始まった……ちょっとピリついてるし……』って。どう？ 笑笑」

「あはは、完全にバレとる……。先生が学習指導要領とか出し始めたあたりから、『あ、これ僕のキャパ超えたわ』って思っ、脳みそが勝手にスリープモードに入ってました。拓也と先生が言い合ってるのも、内容は分からんけど、BGM感覚で聞いてたし……。ピリつくのは苦手なんで、早く平和になれーって念じてま

した笑笑」

「えーっ！ 純平くん、もったいない！ 私は逆にめっちゃ面白かったけどな。先生と拓也くんがバチバチやってるの、なんか法廷ドラマとかアニメの頭脳戦みたいで、ゾクゾクしたもん。『内容難しくて分からんけど、なんか凄そうなこと起きてる！』ってだけでワクワクせえへん？」

「はっ。これだから平和ボケした連中は。議論の中身を理解しようともせず『怖い』だの『エンタメ』だの、お前らそれでも中学生か。俺はあの時間が今日一番マシやったで。純平、お前みたいなのがおるから、話し合いがいつまで経っても『仲良しごっこ』で終わんねん。一生お花畑で寝とけや」

「……私は、純平くんの気持ち、ちょっと分かります。言葉が鋭くなると、空気が張り詰めて……見てるだけで息苦しくなるっていうか……。でも、それがお互いを認めるためのぶつかり合いだったと分かって……今はすぐホッとしてます……」

「それは純平くんにとって正しい反応や。僕は超論理武装型のINFPって言うたやろ？ あの議論のときはNF型の言葉をT型の言葉に翻訳してたわけや。このとき僕は擬似的にNTやった。SFの純平くんと反対側におったんや。だから難

しく感じて正解」

「なるほど……。僕がアホやから話についていかれへんかったわけじゃなくて、単に『チャネルが違った』ってことなんか。反対側におったんやったら、そら聞こえへんのも無理ないわ。……なんか、めっちゃホツとしました。『正解』って言ってもらえると、分かんかった自分も許された気がする」

「……『擬似的なNT』……。つまり、先生は意識的に思考プロセスを『感情』から『論理』へと切り替え、僕と同じプロトコルで通信を行っていたと。……どうりで、話が噛み合うわけですね。さっき建設的な議論を行えたのは、先生のその『翻訳』能力によるものだったんですね」

「先生、マジで何者なん！ 『心の言葉』を『理屈の言葉』に翻訳できるとか、バイリンガル超えてるやん！ 私からしたら、拓也くんとか竜二くんの言葉って宇宙語みたいに聞こえるときあるもん。私もその翻訳スキル覚えたら、もっとみんなと『交信』できるようになるんかな？」

「みんなも普通にできるよ。相手をよく見て、相手の心を想像する。それから相手の求める価値観に歩み寄る。ただそれだけ。難しく考えない。考えるのは相手だけでいい」

『相手の心を想像する』……。私、いつも勝手に相手の顔色読んで苦しくなってきた……。でも、そこから『相手の価値観に歩み寄る』って……。なんか、すごいヒントをもらった気がします……。逃げるんじゃないなくて、近づくための想像力……。私にもできるかな……』

『はっ。『相手のことだけ考える』か。獲物の急所探すときと同じ思考回路やな。先生、あんた言い方は綺麗やけど、やってることは完全に『狩り』やで。相手の欲しいもん餌にして釣る……。一番タチ悪い詐欺師の手口やんけ』

『でも注意してほしいのは、自分自身を変えるわけじゃない。自分自身を変えるのはメンタルもたへんよ。そうじゃなくてあくまでも歩み寄り。僕が擬似的NTになってる間も僕の芯はINFJやった。ダイエットとか筋トレとかをしたんじゃないって、相手の気に入りそうな服を着ただけってこと』

『……。『ダイエットじゃなくて、服を着替えるだけ』……。私、自分の性格が嫌いで、根っこから変えなきゃ生きていかれへんと思ってる……。でも、それってすごくツラくて……。中身はそのまま、上に羽織るものを変えるだけでいいなら……。私でも、無理せずに頑張れる気がします……。』

『擬態』か。ええやんけ、その考え方。マッチョになる努力なんかアホらしいけ

ど、場面に合わせて迷彩服着るだけなら楽勝やな。……中身がどうであれ、外見さえ相手に合わせるときゃ、無駄な衝突も避けられるし。自分を偽るんじゃないって『TPOに合わせた衣装選び』か。フン、悪くない処世術や」

「めっちゃええやん。私、おしゃれ大好きやから『服』って喻えめっちゃしっくりくる！ 『今日は真面目モードのジャケット着よっかな』とか『今は聞き上手なニット着よ！』みたいな感じでしょ？ 自分の性格直すのって修行みたいでしんどそうやけど、『コーデ』やと思えばめっちゃ楽しそう！」

「さて、今日はこの辺で終わるか。次回こそ『いじめ』の話に入っていこな。じゃあ今日もワークシートに感想と今日の自慢書いていってか」
生徒たちは寄り道だらけの授業を静かに振り返る。

「……そろそろ書けたかな。ほんなら前に送ってきてか」
全員のワークシートが先生の手元に集まる。先生は生徒たちの顔を見渡ししながら笑みを浮かべる。

「ところで、前回好評だったミニ授業。毎日やってみる？ 道德に限らず、いろんな教科。どう？」

「えっ、道德以外も？ 数学とか英語とか？ 先生の授業やったら、勉強嫌いな私

でも『裏技』みたいで楽しめるかも！ やってやって！」

「……他教科、ですか。先生の解説は論理的で分かりやすいので、受験や成績向上に資する内容であれば歓迎します。……特に、効率的な暗記法や解法アプローチがあれば助かります」

「はっ。勉強かよ。……ま、普通に教科書読むだけのクソつまらん授業よりは、あなたの話のほうがまだマシか。教科書には載ってない視点で教えてくれるんなら、聞いてやらんこともない」

「えー、勉強増えるん？ めんどくさー笑笑 でもまあ、ガッツリ授業じゃなくて『ミニ』なんやろ？ 先生の話、なんか雑学みたいで面白いし、難しい式とか出てこんのなら聞くわ」

「ええやん！ 道德だけじゃなくて、色んな教科の『最強の装備』が手に入るってことやんな？ 俺、もっと頭良くなりたいし、先生流の授業なら絶対面白いと思うわ。全力で参加します！」

「よっしゃ。ほんなら朝か帰りのホームルームでミニ授業をしていこう。テーマは基本リクエスト制で、特になければ僕の独断で。最初の授業だけは譲られへんからテーマ先に発表するわ。最初のテーマは……、国語『小説の読解』！ 自分の

考えを正しく伝えて、相手の考えを正しく読み取るコツを伝えたい」

「はっ。『作者の気持ちを答えなさい』とかいうクソゲーかよ。一番嫌いなやつや。……けどまあ、現実でも『察してちゃん』の相手すんのはダルいからな」

「おー、国語かぁ。僕、テストとかで『主人公の気持ち』とか聞かれても『知らんがな』ってなるタイプやわ。でも、それが分かったら、もっと空気読むの上手くなれるんかな？」

「めっちゃええ！ 俺ら、せっかく違うタイプの人間が集まってるんやから、お互いのこと正しく理解できるようにしたいし。言葉のキャッチボールが上手くなれば、このクラスの連携も強くなるはずやん。ぜひお願いします！」

「よっしゃ、ほんならさっそく明日からやってみよ。楽しみにしてて。じゃあ終わるか」

「起立。礼」

「ありがとうございました」

終わりのチャイムが鳴り響く。

道徳ノート2 権利と生存戦略

楽しみと億劫さ

- ・人は誰しも、楽しみの裏に億劫な気持ちを抱えている。
- ・楽しみと億劫さは共存し得る。
- ・億劫な気持ちを乗り越えるのは強さである。

教育を受ける権利

- ・義務教育では、生徒が学校に来るのは権利。
- ・来るも来ないも生徒の自由。
- ・選択の結果は自己責任。
- ・自分の選択に文句は言わない。

MBTIと相互補完

- ・「極端」は生きにくい。
- ・自分自身を無理に変える必要はない。

・ 装備を変えるだけでいい。

・ 互いに耳を傾けることで高め合える。

この時間のまとめ

・ 選択の「自由」には「責任」が伴う。

・ 人は皆、不完全。

・ 苦手を互いの得意で補い合おう。

内容項目

(1) 自主、自律、自由と責任

(3) 向上心、個性の伸長

(9) 相互理解、寛容

(15) よりよい学校生活、集団生活の充実

(19) 生命の尊さ

ワークシート2

陽奈のワークシート

「性格を変えなくていい、服を着替えるだけでいい」っていう言葉に、ほんまに救われた気がする！ 私、いつも「落ち着きがない」とか「計画性がない」って言われて、自分の性格そのものがダメなんやと思ってた。でも、無理に変えようとしてしんどい思いをせんでも、場面に合わせて「しっかり者」のジャケットを羽織ればいいだけなんやね。RPGの装備の話もめっちゃ分かりやすかった！ 私にはない拓也くんの論理も、竜二の冷静さも、パーティの装備やと思えば、自分と違うみんながいることがすごく心強く思えた！

『今日の自慢』

自分の「うるさい」性格を、クラスを明るくするための「スキル」やと前向きに捉え直せたこと！

るい先生より

うるさいとは思ったことないな。明るくて元気で良いやんか。そこに論理や冷静さが加わると、もう……強いね。みんなで高め合っていこう！

海翔のワークシート

先生が言ってた「億劫でも来るのが強さ」って言葉、正直ちょっと刺さった。俺もよく思い返すと、朝どうしても学校行くのがダルいときがあって、それを「甘え」やと思ってたから。でも、そのダルさを抱えてここに来たこと自体を「選択」として認めてもらえるなら、明日からもなんとかなる気がする。このクラス、バラバラな奴ばっかりやけど、だからこそ面白い。俺の役割は、みんながそれぞれの「装備」を使いやすいように、クラスの空気をいい感じに調整することになって、改めて思えた。

「今日の自慢」

「学校に来る」という自分の選択を、自分で「偉い」と認めてあげられたこと。るい先生より

やっぱり海翔くんにも億劫なときあるよな。多分しっかりしてるからこそ、他人からの期待に応えようとしすぎてるんちゃうかな。でも海翔くんはそのまま

でも十分みんなの期待通りやと思うよ。

大輝のワークシート

「自由には責任が伴う」という言葉の重みと冷たさを考えていました。『よだか』が星になることを選んだのも、誰のせいにもできない、彼自身の孤独な選択と責任だったのだと思います。先生の言う「心の武装」は、他者を拒絶するための壁ではなく、自分という星の輝きを守るための術なのかもしれません。僕は言葉にするのが苦手ですが、このクラスの多様な「色」の中にいることで、自分だけの輝き方を見つけられるような、そんな気が少しだけしました。

「今日の自慢」

自分の中にある「弱さ」や「迷い」も、よだかのように高く飛ぶための翼になり得ると気付けたこと。

るい先生より

言葉にするのが苦手でもいい。一回素直な感情をぶつけてみて。うまく伝わらなくても僕が汲み取って翻訳するから。大輝くんの個性は大事にしなげら、みんなと成長していこう！

美緒のワークシート

私はずっと、自分の性格が弱くて、すぐメソメソする自分が嫌いでした。「変わらなきゃ」って思うほど苦しくて、自分がなくなってしまうような怖さがありました。でも、「中身はそのまま、上に羽織るものを変えるだけでいい」と言われて、目の前が明るくなりました。優しさを捨てるんじゃなくて、それを守るために「論理」という服を着る。それなら私にもできるかもしれない。このクラスで、自分を守るためのいろんな「コーディネート」を学んでいきたいです。

「今日の自慢」

「INFPのままでいい」と自分を許し、少しだけ自分の感性を好きになれたこと。

るい先生より

僕もつい最近までメソメソしてた。だから美緒さんの感じ方はよく分かる。優しすぎるんよね。悩み始めたときの合言葉は「だから何？」や。心に一人「冷徹美緒」同居させてあげよう。めちゃくちゃ楽になるよ。

純平のワークシート

僕、拓也と先生が難しい話をしてたとき、話についていかれへんくて「自分はアホやから」って諦めてた。でも先生が「チャネルが違うだけ」「翻訳が必要だけ」って言うってくれて、すぐくホッとした。僕は論理的なことは苦手やけど、みんなの雰囲気を感じ取るのは得意かもしれない。違うタイプのみんなの間に入って、言葉を柔らかくする「通訳」みたいなことができたら、このクラスはもっと居心地良くなるんちゃうかなって思えた。

「今日の自慢」

「分らない」ことを恥ずかしがらず、自分なりの感じ方（平和な空気）が大切だと気付けた。

るい先生より

純平くんが平和を愛しているからこそ、純平くんがいるだけで平和な空間が生まれるんや。僕も授業中はバチバチに論理振りかざしてるけど、純平くんの空間に戻ると落ち着くんよ。クラスの通訳者として一緒に平和で温かいクラスにしていこな。

竜二のワークシート

「学校に来るのは義務じゃない、権利だ」って話、今まで聞いたどの大人の言葉より腑に落ちたわ。「来い」って強制されるより、「来なければ損をするのは自分」って突き放された方が、自分で選んで動こうって気になる。「性格を変える」なんてクソ食らえやと思ってたけど、「迷彩服を着て社会に擬態する」っていう考え方は使えるな。自分の領分を守るために、他人に合わせる「演技」も武器としてストックしといたるわ。先生の授業、綺麗事だけじゃないから今のところは聞く価値ありそうや。

「今日の自慢」

先生の仕掛けた「学習指導要領」の罠に気付けへんかったけど、その「策士」ぶりは認めてやった。

るい先生より

僕って、理想は好きやけど綺麗事は嫌いなんよ。だから割と竜二くんにも納得してもらえる授業ができると思う。次回のいじめの授業も「いじめはダメです」みたいなのでは終わらせへんつもりやから楽しみにしてて。

拓也のワークシート

学習指導要領解説における「自主、自律、自由と責任」の定義と、本時の授業展開の整合性には論理的な説得力がありました。特に「OS（本来の自分）を変えず、対人インターフェース（衣服）を最適化する」という考え方は、自己否定に陥ることなく社会適応を図るための、非常に合理的かつ実践的なソリューションだと感じます。システムとして「他者に歩み寄る」行動指針を自己のデータベースに組み込みたいです。

「今日の自慢」

自身の認識の誤り（授業進度の遅れという指摘）を論理的に再評価し、即座に訂正・謝罪という最適解を選択できた。

るい先生より

実は、厳しいこと言うかもしれないけど、拓也くん謝れてへんねん。「謝罪します」ではなく「すみませんでした」が言えていると良かったね。これは僕の感じ方。でも、拓也くんの指摘自体は鋭くて良い議論になるから、次回以降も意見ぶつけてきてな。次回も楽しみにしてるで。

道徳ワークシート

[メモ]

[感想]

[今日の自慢]

[自己評価]

YES ⇔ NO

他の人の意見を尊重できた。

4・3・2・1

自分の考えに自信を持てた。

4・3・2・1

感じ方や考え方が広がった。

4・3・2・1

ミニ授業2 国語「文章と意図の読解」

「おはよう」

るい先生が教室に入ってくる。その手には束になったプリントを持っている。

「じゃあホームルーム始めよか」

「起立。礼」

「お願いします」

「今日は特に伝達事項なし！ほんなら前に言うてたようにミニ授業していこか」

先生は黒板にSNSに投稿された一つの文章を貼り出す。

多様性ってダルいね。どうせ「そういう人がいてもいいじゃん」って言ったら「認められない人がいるのも多様性」とか言うんでしょ。「嫌うな」って言うてるんじゃないかって「存在を認める」って話ね。当人たちが我慢すべきことだって

あるし、周りが配慮すべきことだってある。お互い気持ち良く過ごそうよ。

「この投稿を見てどう思う？」

「えっ、そんな言い方しなくてもよくない!? 多様性を『ダルい』なんて言われたら、必死に頑張ってる人が可哀想やん……。でも、『嫌うな』じゃなくて『存在を認める』ってところは、ちょっと分かるかも。先生も言ってたよね、『自分とは違う』ってのを認めるのが思いやりの第一歩だって」

「はっ。……『多様性はダルい』か。最高に本音じゃねえか。綺麗事を並べて『みんな違ってみんないい』とか言ってる連中より信用できるわ。最後のほうで結局『お互い気持ち良く過ごそう』とか言ってるのは鼻につくけどな」

「……論理的な指摘ですね。特に『認められない人がいるのも多様性』という矛盾した言説に対する苛立ちは理解できます。社会生活を送る上で、感情的な好悪と法的な存在権の承認を切り分けるのは、秩序を守るためには合理的です」

「……多分この投稿をした人は疲れてるんだと思います。誰かを無理に好きになろうとしたり、押し付けられたりすることに……。『存在を認める』っていうのは、誰にも否定されずにそこにいてもいいっていう、最低限の居場所が欲しいっていう叫びに見えます」

「そうやな。でも、なんかこの投稿、言葉強くない？ そんなこと言うなよ……って思っちゃいそうな」

「……確かに、言葉が刺さるというか、ちょっと怖いです……。『ダルい』って一言で切り捨てられると、私みたいな人間はそこにいちゃいけないのかな、って不安になっちゃって……。中身は真っ当なことを言おうとしているのかもしれないけど、冷たい壁を立てられたような気分になります」

「はっ。オブラートに包んで本音を隠すより、これくらいストレートなほうが清々しいだろ。言葉のトゲにビビって中身を見ようとしねえから、いつまで経っても『仲良しごっこ』で終わるんだよ」

「先生の言う通り、ちょっと攻撃的やな。でも、この『ダルい』って言葉の裏には、理想ばかり押し付けられて、本当はみんなが疲弊してるっていう現実があるんじゃないかな。言い方は悪いけど、綺麗事抜きで今の空気を代弁してる感じはするわ」

「僕も、なんか『冷たい煙』みたいな言葉やなって思った。色のイメージで言うところ、重たいグレー。でも、最後の『お互い気持ち良く過ごそうよ』って言葉だけ、ちょっと色が違う気がする。本当は平和にやりたいだけなんかな、って」

「この画像を踏まえて読むとどう感じる？」
 ポイント2の構成案に照らし合わせると非常に明快です。『起』で読者の注意を引

《読解のポイント1》

一貫した論理を主張していることを前提に読む。

揚げ足を取ろうとして「矛盾している」と指摘したがる人は多い。しかし、強い主張をしている人ほど信念を持っており、軸となる主張は一貫していることがほとんどである。

《読解のポイント2》

起承転結を意識して読む。

小説などの物語に限らず、論説文などにも起承転結がある。起（問題提起、フック）承（補足、展開）転（本題の提示、整理）結（結論、主張）。SNSの投稿などでは意識されていない場合も往々にしてあるが、「伝えよう」として書いてある文章では起承転結を意識して書かれていることが多い。

「でもね、この投稿にはこんな画像が添付されてん」
 先生は黒板に一枚の画像を貼り出した。

き、『承』で世間の矛盾を指摘し、『転』で『存在を認める』という本題を提示、最後に『お互い気持ち良く過ごそう』という『結』に着地させています」

「さっきは『ダルい』って言葉にびっくりしちゃったけど、これが『伝えよう』として書かれた文章』なら、最後の一文がこの人の本当の気持ちなんやね！『起』のフックにまんまと引っかかった。主張が一貫してるって分かったと、本当はみんなで気持ち良く過ごしたいってのが伝わってきて、なんか安心した！」

「……『揚げ足を取ろう』として矛盾を指摘したがる人は多い』って言う言葉、ドキッしました。私も最初の言葉が怖いと、それだけで『この人はひどい人だ』って決めつけそうになってたから。でも、これは攻撃じゃなくて、みんなが生きやすくなるための願いなのかもしれません……」

「なんかこの画像の『読解のポイント』って結構使えそうじゃない？」

「めちゃくちゃ使えそう！　これって、先生が前に言ってた『翻訳』の技術そのものやな。強い言葉にビビるんじゃないくて、『これは起承転結のどこかな？』って冷静に分析するフィルターを持つだけで、相手のほんまに言いたいことが見えるくる気がする」

「はっ、実戦的だな。特にポイント1の『矛盾を指摘したがるやつが多い』っての

は図星だろ。揚げ足取って勝った気になるんじゃないくて、あえて『一貫した論理がある』と仮定して読む方が、相手の急所……『信念の軸』を正確に捉えられる。効率的な戦い方やんけ」

「……私も、すごく助かるポイントだと思います。いつも感情的な言葉をぶつけられると、頭が真っ白になって『転』の本題や『結』の主張まで辿り着けなかったから。『これはフックだ』って自分に言い聞かせることができれば、もっと穏やかに人の話を聞けるようになる気がします」

「非常に有用なプロトコルです。特にSNSのような短文では情報の圧縮率が高いため、この『起承転結』の構造を意識してデコードしなければ、深刻な読み取りエラーが発生します。『強い主張をする人ほど信念がある』という前提に立つことは、無駄な衝突を避けるための合理的な生存戦略と言えますね」

「なんか、心のX線写真みたい！ どんなにトゲトゲした言葉の服を着ても、このポイントを使えば、その中にある『伝えよう』っていう本当の形が見えてくるんやもんね。これがあれば、どんな『ダルい』話でも、もっと前向きに面白がつて読めそう！」

「あと、補足するとすれば『書いてあることをもとに読む』ってことかな。たとえ

ば『ごん狐』の最後『青い煙』が描かれてたよな。このときの兵十の気持ちを『ごんへの憎しみ』とか『憎い敵を討った満足感』と読んだら間違いなんや。兵十は『火縄銃をばたりと』とり落としたんやから。『取り返しをつかない後悔』や『寂しさ』を感じているはず」

「非常に合理的です。文章読解における『客観的証拠』の重視ですね。火縄銃を『ばたりと』とり落とすという物理的な動作は、兵十の精神的支柱が崩壊したことを示す有力なデータです。それを『満足感』とデコードするのは、システム内のデータを無視した、明らかな読み取りエラーと言えます」

「あ、前の授業でも話したよね！ 筒口から出る『青い煙』が、取り返しのつかない寂しさを出してるって。兵十が銃を落としたっていう事実があるからこそ、あの結末が胸に刺さるのよね。自分の勝手な想像で兵十を『悪い人』にしちゃったら、物語が全然違う色になっちゃう！」

「はっ。さっきの『察してちゃん』の話にも通じるな。自分の脳内で勝手に相手の気持ちを捏造するんじゃないくて、目の前にある『行動』っていう事実から意図を読み取れることだろ。銃を落としたって書いてある以上、そこに『満足』なんてねえ。それはただの残酷な現実だ」

「……書いてあることを、そのまま受け取る。私、悲しい話を読むとき、つい自分の不安な気持ちに乗せすぎて読んでしまうことがあります……。でも、先生が言うように『兵十の動作』を道標にすれば、迷わずに相手の本当の悲しみに寄り添えるんですね。それも一種の『論理の鎧』なんだなって思いました」

『想像力』は大事やけど、それはあくまで『書いてあること』の土台の上で働かせなあかんってことやな。自分勝手な解釈で相手を決めつけへん。これ、国語のテストだけじゃなくて、リアルの人間関係でも一番大事なこともしれへんな」

「そういうことや。書いてあることを信じる。じゃあここでみんなに今日一日の課題を出すわ」

先生は問題用紙を配る。

「これを今日の終わりのホームルームに提出して。相談はしてもらって構わへんけど、自分の言葉で書いてな。特に、感じたこととは自分の感じたことをそのまま書いてな」

「うわっ、結構ボリュームある！ えっと、タイトルは……『僕が世界に色を取り戻した日』？　なんか素敵」

『色を取り戻した日』か……。最初は『五月蠅い』としか思えなかった蟬の音が、

最後には『眩しく、鮮やかな色』に変わるって、なんか素敵だな。僕なりにゆっくり味わってみたいな」

「……設問は全部で11問。文章読解だけでなく、漢字の書き取り、英文構成、さらには確率の算出まで含まれていますね。多角的なりテラシーを要求される構成のようです」

「おー、これはやりがいがありそうやな！ 相談OKってことは、みんなで知恵を出し合えてことやろ。よし、まずは一回、ざっと中身に目を通してみよ。……秋登に奈々未、友達の名前もいっぱい出てくるな」

「ちなみに問題自体はまだ習ってない内容とかも入ってると思う。今回重視してほしいのは読解パート。その他は分かりそうなら、って感じでいいよ。読解と感想のところ書いて提出してな」

「未習内容が含まれているとのことですが、論理的に推論可能な範囲であれば、既習の知識を応用して最適解を導き出す訓練になりますね。ですが、本日のアジェンダが『情報の正確なデコード』にある以上、指示通り読解と感想の記述を最優先し、リソースを配分します」

「……よかった。数学の確率や英語の並べ替えは、今の私にはまだ難しそうで少し

パニックになりかけていたので、安心しました。悠佑くんの心に、じっくり向き合ってみたいです」

「『感じたことをそのまま』ってのが一番燃えるわ。この物語の中で『色』が何を意味しているのか、みんなで相談しながら深掘りしてみるな。一人で考えるよりも、みんなの視点があつたほうが、悠佑の見た『眩しい世界』がより鮮明に見えるてくる気がするし」

「ほなら、朝のホームルームはこの辺にしとこか」
「起立。礼」

「ありがとうございます」

先生は静かに教室を後にする。

生徒たちは早速、課題と向き合い始めた。

問題

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

1

静かな朝に響き渡る蝉^{せみ}の声。それを美しいと思う日が来るなんて、思ってもみなかった。それまでは五月蠅^{うるせ}いとしか感じなかったその音に耳を澄ますと目を閉じた暗い世界に鮮やかな空色が広がる。あの日、僕の世界に光が差した。

2

白い世界、澄んだ空気、肌を突き刺す寒さ。いつものように自転車で学校へと向かう。(A) ホソウされていないサイクリングロードでは、自転車が激しく跳ねるが、慣れたものだ。

学校の駐輪場に着くと、そこには奈々未^{ななみ}がいた。声をかけ、一緒に二階へ上る。僕は奈々未と喋りながら教室に入った。先に教室にいた秋登^{あきと}がいつものように茶化^{ちや}してくる。

「お前ら今日も一緒か。絶対付き合ってるやろ。うん、これは絶対にそうやわ」「何言ってるんねん。そんなわけないやろ。それ以上言うたら、二度と口きけんよ」に引きずりまわすぞ」

決まってこのやり取りから一日が始まる。茶化されても悪い気はしない。むしろ、どこか嬉しいと感じている自分がいる。

僕は人と喋るのがそんなに好きではないが、奈々未や秋登と喋るのは楽しい。僕のことをよく知っていて、扱いが上手いからだろう。

準備を終えてぼーっとしていると、一時間目のチャイムが鳴った。つまらない授業は眠くなる。しかし、英語の授業は違う。仲の良い友達とペアを組むことができるからだ。僕は秋登とペアを組み、会話練習をする。

「What did you do yesterday?」

「I went shopping with my girlfriend.」

「Wait..., what? You have a girlfriend?」

「Haven't I told you that?」

「Who is your girlfriend?」

「Haruna is.」

「When did you two get together?」

「December 13th. I mean, umm..., last month.」

「Oh, I see.」

秋登との会話は英語でも弾む。

英語の授業も終わり、その後も数学、現代文、物理、体育、化学の授業を受け、掃除を済ませた。秋登は野球部の練習に行ったが、僕は部活に入っていないのでそのまま家に帰る。今日もいつも通りに一日が終わる、そう思っていた。

ドンッ、ガシャン――

体が宙を舞う。秋登、奈々未、春奈……。仲の良かった友達の顔が頭をよぎる。(B) それと同時に、行事や授業、楽しかった日常も思い出す。僕は……

ドゴッ――

3

ここはどこだろう。俺は今、何をしとるんやろう。今は何時なんやろう。

「悠佑!」

誰かの名前を呼ぶ女の声がする。

「目え覚めたか!」

男と女が俺の近くに駆け寄ってきた。

「悠佑、心配したやんか!」

俺に言うところんか? (i) ユウスケって誰や。そもそも、この子ら誰なんや。

「悠佑、三か月ぶりやな」

「ユウスケって誰ですか？ 俺は——」

俺の名前って何やったつけ。親は……。あれ、名前が思い出されへん。もし
かして……

「悠佑はお前の名前や。学校帰りに車に飛ばされて頭打ったらしいから、記憶
がないんかもしれへんな。車は逃げてもうたみたいやけど、外周を走ってた
サッカー部が見つけて通報してくれたんやっさ。次の日先生から聞いて
びっくりしたわ。しかも全然起きてくれへんのやもん……。心配でたまらん
かったんやで」

「俺、名前とか全然思い出せなくて……。あなたたちは誰なんですか？」

「俺は秋登でこっちは春奈。お前の親友やから敬語使うのやめてくれ」

アキトとハルナか。アキトの喋り方って優しいし……。親友？ こんな美男
美女が俺の親友とか最高かよ。この子ら絶対みんなから人気なんやろうな、え
え子やし。俺って幸せ者やな。

「わかった。名前は呼び捨てでええんかな？」

「うん、いつも呼び捨てやったから、それでええんちゃうかな」

「私も呼び捨てがいい！」

「あつ、あともう一人、奈々未っていう子もおるんよ。さっきまでおったんやけ
ど、外が暗くなったから帰ってたわ。でも、奈々未もお前と毎日一緒にお
る親友やし、明日もまた来るんちゃうかな、⁽ⁱⁱ⁾知らんけど」

「知らんのかいっ」

「おつ、久しぶりのツッコミもキレキレやなあ」

「あ、もうそろそろ時間来ちゃう」

「ほんまや、俺らもそろそろ帰るわ。久しぶりに話せてよかった。じゃあ、また
明日な」

「ありがとう。またね」

アキト、ハルナ、ナナミ、俺はユウスケ。書くもん何かないかな……。あった。

自分の名前はやっぱり漢字で書きたいよな。どこかに……。そうや、部屋の入
り口に——。

あ、そうか。寝たきりやったから、急には動かれへんわ。ナースコール使え
ばええか。

「はい、こちらナースステーションです。根岸様です。どうされましたか？」

「目が覚めたんですけど、移動できなくて……」

「すぐそちらに向かいますね。少しお待ちください」

医者？看護師が駆けつけた。

「気分はどうですか」

「気分は大丈夫なんですけど、記憶が……」

「そうですね、頭を強く打たれたようなので、記憶障害があるかもしれません。

いくつか質問してみますね。ご自身のお名前を教えてください」

「えっと、ネギシ……ユウスケ……です。でも、初めは完全に忘れていて、下の

名前は友達に教えてもらったんです。上の名前はさっきのナースコールで」

「そうですね、分かりました。では、生年月日を教えてください」

「生年月日は……、分かりません」

「では、性別と血液型は分かりますか？」

「性別は男です。血液型は……分かりません」

「学校の勉強について、得意な教科などは覚えていますか？」

「理科と英語が得意です」

「なるほど。得意な教科は覚えているようですね。悠佑さんの血液型から、ご両親の血液型はどちらもO型以外であると断言できます。ご自身の血液型は分か
りますか？」

「ええっと、**A**型ですか？」

「正解です。理科の知識が残っているようですね。では、現在、世界の血液型の

人口比が⁽ⁱⁱ⁾シユウソクしているとしします。悠佑さんが**A**型であるという
ことは、ご両親がともに**A**型である条件付き確率はいくらでしょうか？」

「紙とペンを貸していただけますか？」

「どうぞ」

病院で解く問題にしては、ちょっと難しすぎひんか？ まあええけど。よし、まずは人口比求めていくか。血液型はA B Oの組み合わせで、AAとBBとOOは対称的やし、AOとBOとABも対称的やな。それぞれの割合をsとっておいとくか。ほんで表を書いて……、あ、なんか綺麗な式になりそう。

$s = \frac{Q}{Q+R} = \frac{R}{R+S}$ か。 $\frac{Q}{Q+R} = \frac{R}{R+S}$ 型って、計算上はAB型よりもレアなやな。

あとは条件付き確率が……。条件付きとは言いながらも、求めたいのはたどの確率なんよな。子が $\frac{P}{P+Q}$ 型になる確率は $\frac{P}{P+Q}$ やった。両親も子も $\frac{P}{P+Q}$ 型になっているのは全体の $\frac{P}{P+Q}$ やから、確率は――

「W」です」

「That's correct! Your calculation skill is great! I'm jealous.」

「Why are you speaking English? Would you speak Japanese?」

「英語も身に付いているようですね。学習の方は問題がないようなので、ここからはゆっくりと経過を見ていきましょう」

「あ、俺の名前の漢字を教えていたでもいいですか？」

「(iii) ジジツムコンの根、ヨウガンフソンの岸、ユウゼンジトクの悠、にんべんに右と書いて佑です」

……根岸悠佑、か。漢字で書いてみたけど、やっぱり見慣れへんな。なんやろうこの感じ。俺の中に溜めてきた思い出やら積み上げてきた人間関係だけが、一つ残らず奪い去られてしまったような……。

そう思った途端に目の前の世界が闇に包まれた。

過去を奪われて、どうやって生きていけばええねん。今の俺には何の思い出も残ってないんや。いや、今は悩んでもどうにもなれへん。深く考えすぎるな。無駄なエネルギーを使うな。そうや、今日はとりあえず寝よう。考えるなら、明日起きてからや。

4

やはり俺の世界は暗かった。

午前中には家族が会いに来たが顔も名前も分からなかった。

しかし驚いた。俺が目覚めたことをあそこまで喜んでくれる母がいたとは。喜びすぎて、静かにするように看護師さんに注意されていたのは思わず笑ってしまった。姉は明るく面白い人だった。父は……、つつこみどころの多い人だったけれど、あの感じ、嫌いではない。

名前を忘れる前にメモしておこう。母セイラ、父リュウコウ、姉モネ。

名前をメモしたノート、そこに書かれた名前だけはこの世界で輝いて見えた。空が赤く染まりかけた頃、三人の男女が会いに来た。そのうちの二人は知っている。アキトとハルナだ。ということは……、

「アキトとハルナ、今日も来てくれたんやな。もう一人は、ナナミ？」

「悠佑、よう覚えとったな。そうそう、これが奈々木」

(iv) ナナミの目は、その曇った顔に似合わず、きらきらと輝いている。

「悠佑！」

「くはっ、ちょっと待った！ 落ち着いて。俺、一応病人やから、優しく扱ってちょ」

いきなり抱きつかれてびっくりした。

「え？」

「ん？」

「悠佑、どうしたん」

「いや、事故で頭打って――」

「そうじゃなくって！ 悠佑、今まで『俺』なんか言わへんかったやんか！」

「言われてみれば……、確かに」

「そなの？」

「うん、お前いつも『僕』って言ったわ」

「急に『俺』とか言い出したら……、ギャップ萌え」

「「……えっ？」」

ナナミの発言を聞いて、三人の声が揃った。

「もう、好き」

急な展開に頭が追いつかない。

「どうか、ずっと前から好きやったんよ。付き合ってくれへん？」

返事に困る。ずっと一緒にいた親友ということは、ナナミのことを好きだったのかもしれない。だがそれは過去の俺。今の俺はナナミのことをよく知らない。

「返事は時間ちょうだい。もしかしたら俺も前は好きやったかもしれへん。でも今はナナミのことをよく知らんから、思い出すか知り直すかするための時間が欲しい。返事はそれまで待ってくれる？」

「おけ、急にごめんね」

「……いや、お前ら二人は何ニヤニヤしてんねんっ！」

四人で顔を見合わせて笑いあう。部屋が光に包まれた。

5

許可が出たので、翌週から学校に復帰することになった。朝はナナミが家まで迎えに来てくれた。一緒に学校に行くと、駐輪場にはアキトとハルナもいた。二人とも待っていてくれたのだ。クラスは先月発表されたようだが、三人と同じクラスになっていた。

四人で教室に入ると、クラスがざわついた。

「根岸君が来た！」

「大丈夫やった？」

「待ってたよ！」

俺に掛けられるどの言葉も、温かみを帯びている。だが、顔も名前も覚えていない。

「悠佑は事故の前の記憶がないから、みんなの名前とかは覚えてないと思う。」

でも――

秋登がそう言いかけたとき、みんなはその言葉を⁽⁹⁾「サエギ」った。

「そりゃ仕方ないやろうよ。だってあんなに大きい事故やったんやもん」

「入学した初日は名前知らん人ばかりやったやん？ あんな感じで思ってたらええんとちゃう？」

「そんなに心配せんでええよ」

眩しい世界に目から温かい感情が⁽¹⁰⁾「フ」き出す。

一時間目の授業は現代文だった。出席確認のために名前が呼ばれる。朝のホームルームのときに担任が貰った名簿を見ながら、顔、声、名前を一致させていく。まだ全員の顔と名前を覚えられたわけではないが、暗い世界の中で輝くこの狭い空間には、⁽¹¹⁾徐々に色が戻ってきた。

久しぶりの授業で、分らないところがあるかもしれない、そう不安に思っていたが、この一週間奈々未のよくまとまったノートで勉強したからか、今日の授業にはついていけた。

昼休み、俺が弁当を食べ終わってぼーっとしていると、俺の机の周りに五人集まってきた。手にはそれぞれ、数学の問題集、物理の教科書、化学の課題、古典のノート、英語のワークを持っており、教えてほしいと頼まれた。秋登が言うには、これが日常らしい。それぞれに知識を噛み砕いて、なるべく理解が易いように教えていく。みんなが内容を理解して、笑顔でお礼を言ってくれるのが、とても嬉しい。

数学、化学を教え終わって、物理を教えていると、過去に同じように教えていた記憶が急に甦^{よみがえ}った。⁽¹²⁾それと同時に、行事や授業、楽しかった日常も思い出す。頭の中を駆け巡る記憶に、涙が溢れる。

「え、根岸くん！ どうしたん！」

心配の声を聞いて、秋登と奈々未が駆け寄ってくる。

「んー、へへっ、急に記憶が戻ってさ」

「悠佑……」

秋登と奈々未が、座っている僕に抱きついてくる。僕の名前を呼ぶ二人の声は震えている。途切れぬ涙をぐっと⁽⁶⁾コラえて顔を上げると、周りにいた友達も涙を浮かべている。それを見て一度はコラえた感情が噴き出す。涙を拭っていると、教室のドアが開く。

「はーい、そろそろ……、ん？　おい、どないしたんや！」

「いや、根岸くんが……」

「おう、」

「あの、記憶が、急に戻ってきて……」

「そうなんか！　良かった、ほんまに……、良かった……」

「ちょ、先生まで泣かんといてや！」

教室に涙と笑顔が溢れる。

「よしっ、とりあえず五限目始まるから、一旦切り替えて準備しよ」

先生の声とチャイムの音が重なる。

「じゃあ、授業始めようか。まず、根岸！　先生のこと思い出した？」

「ちゃんと思ひ出しましたよ。暑くる……いや、熱くてめっちゃ頼りになり

ます！」

「おいー、今、暑苦しいって言いかけたやろ！　聞き逃さへんぞ！」

教室に笑い声が響き渡る。僕の見る世界は、眩しく、鮮やかな色に染まっている。黒一色で塗りつぶされたように感じられた世界は、黒色の裏でも絶えず光を放っていた。

そうだ、後で奈々未に伝えなきゃ。ずっと傍にいてくれた奈々未のこと、僕はもちろん――

1. 傍線部 (A) ~ (E) のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- (A) ホソウされて
(B) シュウソクして
(C) サエギった
(D) ワき出す
(E) コラえて

2. 空欄 [] ~ [] について、次の問いに答えなさい。

- (1) [] には「なんで教えてくれへんかったんや」という意味の英文が入る。次の () 内の語句を並べ替えて、その英文を完成させなさい。
(didn't / me / tell / why / you / ?)

- (2) [K] には「知ってるもんなやと思ってたわ」という意味の英文が入る。次の英文の () 内の動詞を正しい形に直し、その英文を完成させなさい。
I (think) you (know) .

- (3) 「 [L] you two look happier [M] 」は「だから最近二人して幸せそうにしてたんか」という意味の英文である。[L] と [M] に入る語句を次の ① ~ ⑥ のうちから一つずつ選び、それぞれマークしなさい。

- ① That's because ② That's why ③ Thereafter
④ currently ⑤ presently ⑥ recently

3.

空欄 [P] ~ [W] について、[P] · [U] には血液型、[Q] · [R] には s と t の式、[S] · [T] · [V] · [W] には値を、それぞれ答えなさい。

4. 傍線部 (i) について、「悠佑」の発言や思考に出てくる名前の表記には、漢字とカタカナの二種類が混在している。この表記の違いが表す内容として最も適当なものを、次の ① ~ ⑤ のうちから一つ選び、マークしなさい。

- ① 事故によって「悠佑」の性格が変わってしまったことを表しており、信義に厚い性格を漢字で、何事もおざなりにする性格をカタカナでそれぞれ表現している。

- ② 事故によって友人との距離感が変わってしまったことを表しており、親しみのある呼び方を漢字で、他人行儀な呼び方をカタカナでそれぞれ表現している。

- ③ 事故によって「悠佑」の感情が大きく変わってしまったことを表しており、前向きな感情を漢字で、ネガティブな感情をカタカナでそれぞれ表現している。

- ④ 事故によって「悠佑」の記憶の種類が変わってしまったことを表しており、視覚的に覚えている名前を漢字で、聴覚的に覚えている名前をカタカナでそれぞれ表現している。

- ⑤ 事故によって「悠佑」が記憶を失ってしまったことを表しており、過去の明るさを漢字で、過去を失った中で見出した未来への希望をカタカナでそれぞれ表現している。

5.

傍線部(ii)について、ここでの「知らんけど」が表す意味として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選び、マークしなさい。

- ① 「奈々未」が来るかどうかは知らないが、でたらめな発言をした。
- ② 「奈々未」が来る可能性は高いと考えているが、断言はできない。
- ③ 「奈々未」が来るとは思っていないが、励ますために嘘をついた。
- ④ 「奈々未」が来るとは思っているが、サブライズのために誤魔化した。

6.

傍線部(iii)について、次の問いに答えなさい。

- (1) カタカナで書かれた三つの四字熟語を、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① ジジツムコン
- ② ゴウガンフソ
- ③ ユウゼンジトク

- (2) 医師が口頭でこのように説明した理由として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選び、マークしなさい。

- ① 筆記具が手元になかったため。
- ② 四字熟語を使えば伝わりやすいと考えたため。
- ③ 「悠佑」の国語に関する記憶を試すため。
- ④ 難しい伝え方をすることで優越感に浸るため。

7.

傍線部(iv)について、「ナナミ」の目を輝かせていたのは何か。文章の中から一字で書き抜きなさい。また、それと同じものを表す表現を文章から五字で書き抜きなさい。

8.

傍線部(v)について、この作品における「色」は何を表しているか。文章から二字で書き抜きなさい。

9.

この作品の題名は『僕が世界に色を取り戻した日』である。「悠佑」が世界に「色」を取り戻したのはいつのことか。文章から二字以上六字以内で書き抜きなさい。ただし、書き抜く語の表記は問わないものとする。

10.

この作品の舞台となった県は、南北で気候が大きく異なる。その理由および南部と北部のそれぞれの気候の特徴を、九十字以上百字以内でまとめなさい。ただし、解答の中に①県名、②地形名、③気候の分類を含めること。

11.

傍線部(x)・(y)は、全く違う場面であるにも関わらず、全く同じ文が用いられている。これによってどのような印象を受けたか、百八十字以上二百字以内で書きなさい。

解答用紙

1.

(E)	(D)	(C)	(B)	(A)
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
えて	き出す	つた	して	されて

2.

(1)	(2)
<input type="text"/>	<input type="text"/>
..	..

(3)

(3)	(3)
<input type="text"/>	<input type="text"/>
..	..
①	①
②	②
③	③
④	④
⑤	⑤
⑥	⑥

3.

(3)	(3)	(3)
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
..
型	型	型

4.

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
..
型	型	型	型	型

5.

(1)	(2)	(3)	(4)
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
..

6.

(1)	(2)	(3)
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
..
根	岸	悠

「よっしゃ、じゃあ帰りのホームルーム始めよか」

「起立。礼」

「お願いします」

「まずは解答用紙集めよか。前に送ってきて」

「ほらよ。あの血液型の確率計算、あんなの病院で出されたら俺なら発狂するけど、悠佑はさらっと解いてんのな。『知らんけど』っていう秋登のセリフも、俺なりに解釈しといてやった」

「回収しました。読解のポイントに従い、本文中の動作などの客観的証拠に基づいた分析を行いました。漢字とカタカナの表記の使い分けに関しても、彼の認識の変化を論理的にデコードして記述してあります」

「悠佑くんが闇の中でノートの『名前』に光を見つけるシーン、私も自分のことみたいに胸が熱くなって……。正解かどうかは分からないけど、あの瞬間に私が感じた『色』を、そのまま言葉にしてみました」

「僕も、悠佑くんが世界に色を取り戻していくときの、あの眩しいイメージを大切に書きました。難しい理屈は拓也に任せたわ。僕が感じた『温かいオレンジ色の空気』、先生に伝わるいいな」

七人の解答

1. (A) 舗装(されて)
 (B) 収束(して)
 (C) 遮(った)
 (D) 湧(き出す)
 (E) 堪(えて)
2. (J) Why didn't you tell me?
 (K) I thought you knew.
 (L) ② (That's why)
 (M) ⑥ (recently)
3. (P) AB (型)
 (Q) $s = (s + t)^2$
 (R) $t = 2(s + t)^2$
 (S) $s = \frac{1}{9}$
4. ④
 (W) 9
 (V) 2
 (U) O (型)
 (T) $t = \frac{2}{3}$
5. ②
 (1) ① 事実無根
 ② 傲岸不遜
 ③ 悠然自得
6. (1)
 ② 傲岸不遜
 ③ 悠然自得
7. 一字.. 涙
 五字.. 温かい感情

8. 記憶

9. 五月

10. 瀬戸内海側と日本海側が中国山地によって隔てられているために気候が大きく異なる。兵庫県の南部は一年を通して降水量が少ない温暖な瀬戸内の気候、北部は冬に積雪が多い日本海側の気候をそれぞれ形成している。

11. 陽奈の解答

同じ文が繰り返し返されることで、悠佑くんがどれだけ友達や日常を大切に思っていたかが、すぐく伝わってきました。一回目は、死ぬかもしれない瞬間に「もう会えなくなる」っていう悲しい気持ちで思い出して、二回目は、記憶が戻った時に「また会える」っていう嬉しい気持ちで思い出しているように感じました。同じ思い出でも、思い出すときの気持ちによって全然違う宝物になるんだなって思いました。

美緒の解答

一度目は、体が宙に舞う、冷たくて怖い場面で、楽しかった日常が遠くに行ってしまう寂しさを感じました。二度目は、友達に囲まれた温かい教室

で、一度失ってしまった日常がまた戻ってきた喜びを感じました。二つの場面で同じ言葉を使っていることによって、悠佑くんが感じた「これから失うものの大きさ」と「取り戻せたものの温かさ」の対比がより一層際立って、胸が苦しく、でも温かくなりました。

拓也の解答

意図的な反復表現だと分析します。一度目の回想は、死の直前に人間が体験されると言われるフラッシュバックであり、失われるものの価値を提示しています。二度目の回想では、一度目と全く同じ内容を再生することで、彼が取り戻した記憶が「事故前の自分と完全に地続きである」ことを論理的に示しています。記憶の完全な回復を読者に納得させることのできる、非常に効果的な手法だと感じました。

海翔の解答

一回目の「思い出す」は、過去との決別、つまり「死」を覚悟した時のものやと思う。楽しかった自分との別れや。でも、二回目の「思い出す」は、過去と現在が再び繋がった、「生」を実感した瞬間のもの。二回の「思い出す」が「死」と「生」で強く対比されると感じた。同じ言葉を

使うことで、「死」の淵から「生」の世界へ帰ってきた、悠佑の劇的な復活を、読者に強く印象付けてるんじゃないかな。

大輝の解答

一度目は、体が現実から切り離されて、記憶だけが心の中に存在する、純粹な「内面の世界」の出来事なんだと思います。それに対して、二度目は、友達という「外の世界」からの刺激によって、記憶が呼び覚まされている。同じ言葉が、内側からと外側からのそれぞれの世界から繰り返されることによって、悠佑さんの失われた自己が完全に取り戻されたということを示しているように感じました。

純平の解答

一度目のほうは、真っ白な霧の中にポツンと置かれた「青い点」みたいな、どこか冷たくて鋭いイメージだった。でも、二度目のほうは夕焼けのようなオレンジ色に変わって、彼の心にじわっと広がっていく感覚を受けた。同じ言葉をあえて繰り返すことで、読んでいる僕の頭の中にも悠佑が感じた「音の色」の変化が直接響いてきた。静かな朝の蝉の声が美しく変わっていく、物語のリズムそのものを表しているような、そんな印象を受

けた。

竜二の解答

最初のやつは、全部失うってときの、どうしようもねえ痛みだろ。この瞬間に全部失う覚悟をしたってことじゃねえのか。逆に二回目のやつは、失ったものが全部戻ってきたってときの安堵だろうな。二つの場面で全く同じ言葉を使ってるのは、失ったもんが、ちゃんとそのままの形で戻ってきたってことを見せるためだろ。一度無くしてしまった全てのものが、傷一つなく完全な状態で戻ってくる。まあ、簡単に言えば奇跡みたいなもんだな。

生徒たちの提出した解答にざっと目を通し、先生は感心した表情を見せる

「完璧やんか。ほんで、11.の受けた印象もそれぞれに感じたこと書いてくれてめちゃくちゃええな。数学も高校レベルやのにちゃんと解けとるし。凄えわ。一応、ざっと確認しとこか」

先生は、まるでクイズの答え合わせをするように、楽しそうに解説を始める。

「1.は漢字の書き取りやな。ちなみに『心配でたまらんかった』ってところはもともと漢字で書かれてて、『こらえる』っていう字と同じなんや」

「2.は英語やな。この会話文、文法的に気になるところなかった？」

「文法規準に照らせば、疑問文は助動詞『Do』を伴うのが正しい構造です。テストであれば、明らかな失点ポイントです」

「えっ、ほんまや。全然気づかんかった！普通に『You have a girlfriend?』って聞いているだけやと思ってた。……そうか、疑問文やから、ほんまは頭に『Do』をつけなあかんのか」

「確かに！先生、そこが『生きた会話』と『テストの英語』の境目ってことやな。俺ら、完全に物語の世界に入り込みすぎて、文法チェッカーがオフになってたわ。でも、そうやって『違和感』をスルーさせるくらい、会話に熱があったってこ

とやんな！」

「でも、これはこの場面において正しいんやぞ。Do you have a girl friend? は『彼女がいるかどうか』の確認やけど、ここでは『Yes/No』を訊きたいわけじゃないよな。耳を疑った『内容の聞き返し』や」

「……なるほど。情報の『真偽の確認』ではなく、入力された情報の『再処理』……つまり、驚愕によるエコーとしての疑問文ですか。文法プロトコルを遵守することよりも、脳内での情報処理が追いついていないという『現状』を正確にデコードするための表現、というわけですね」

「はっ。要は『型通り』に喋るのが正解じゃねえってことだろ。『動揺』を表現するためにあえて文法をぶっ壊す……。教科書通りの英語しか知らねえ奴には書けねえ、生きた言葉の使い方だな」

「親友の意外すぎる告白に、文法なんて気にしてられへんくらいの『素』の反応が出ちゃったんやな。これが『書いてあることを信じる』ってことの深さか……。単なるミスじゃなくて、そこに『感情』が乗ってるのを見つけるのが読解の面白さなんかもな！」

「ちなみに、春奈の彼氏は読み間違えへんようにね。秋登やで」

「……そっか。悠佑くんは、自分が奈々未ちゃんを意識しているからこそ、親友の秋登くんが先に『幸せ』を掴んでいたことに、余計に驚いちゃったのかもしれないね……。なんだか、この英文が急にドキドキする会話に見えてきました」

「秋登、やるなあ。英語の授業中にさりげなく自慢するなんて、なかなかニクい演出やわ。悠佑くんが最後に『幸せそうやったんやな』って納得するのも、二人の仲の良さを知ってるからこそやね」

「病院の場面とか分かりやすいよ。秋登と春奈、奈々未と悠佑の組み合わせやな」
先生の指摘に生徒たちは納得する。悠佑の彼女が春奈だったら、その後の展開に矛盾が生じるのだ。

「3.は確率を頑張って求めてもらって。4.は悠佑自身の名前の表記に注目すると分かりやすいかもしれへん。カタカナは音を表してるんや」

「5.は関西人なら汲み取ってほしいニュアンスやな。関東の人に誤解されへんように使うタイミングは気を付けてな。6.は医者レベルがおかしかったけど、やりたいこととしては記憶の確認や。ついでに確認した、ぐらいの感じやな」

「ほんで7、奈々未の目を輝かせたのは『涙』や。涙を表す他に使われてる表現としては『温かい感情』」

「8、『色』ってのはこの物語では『記憶』の象徴やな。似た表現として『光』も出てきたけど、こっちは『幸せ』の象徴なんや」

「9、悠佑が記憶を取り戻したのはクラス発表から一か月後。つまり五月頃や。ほんとでここでもっちゃトリッキーなんやけど、書き出しの『それまでは五月蠅いとしか感じなかった』ってところに『五月』って入ってたんや笑笑　ってことで『五月』が答え」

「10、これは方言から関西、特に阪神あたりと分かる。氣候が南北で大きく異なるのは……我らが兵庫県やな」

「って感じ。朝にやった読解は完璧やったからもう言うことなしや」

生徒たちは、自分たちの解答と比べながら、「あー!」「なるほど!」と声を上げた。

先生はそこで悪戯っぽく笑う。

「ちなみにこの小説は僕が書いたよ」

シン、と教室が静まり返った。

「……ええええ!!　この小説、先生が書いたんですか!　凄い!　凄すぎます!」

「……マジですか、先生。俺ら、いま作者本人に読解教わってたんか。そら、贅沢

すぎるわ……」

「なるほど、解答の根拠は理解しました。しかし、それよりも、先生がこの文章の作者だったとは……。驚きました。国語だけでなく、数学や地理の要素まで含んだ物語を創作できるとは。……尊敬します」

竜二は、何も言わない。ただ、手元の問題用紙と、先生の顔を、信じられないというように何度も見比べている。美緒、大輝、純平も、開いた口が塞がらない、という表情だ。

自分たちがこの一日、夢中になって議論し、協力して解き明かそうとしていた世界のその創造主が、今、目の前にいる。その事実には、生徒たちは、これまでのどの授業とも違う、最大級の衝撃と感動を覚えていた。

「……にしても『五月』はズルいですよ先生！ そんなの分かるわけないです！」
陽奈が笑いながら話を戻す。

「うんうん。五月はなかなかトリッキーよな、自分でも思う笑笑 この問題は国語ってより『自分の推論を信じて答えを探し出す』って能力や。だから、どちらかというと道徳に近いかも。でも、いうてみんなちゃんと答えてくれてたやん。

11. は個人が感じた印象やから、バリバリに道徳やな」

先生のその言葉に、生徒たちは「え、そういうことだったの？」と顔を見合わせた。特に、ただの引っかけ問題だと思っていた陽奈は、目を丸くしている。

「えー！　そういうことだったんですか！　ただの意地悪な引っかけ問題じゃなかったんだ……。自分の『あれ？』って思った直感を信じる力か……。深い！　納得しました！」

「なるほど。『五月』という答えは、根拠として『五月蠅い』があるにも関わらず、あまりに意外なので、自分の推論を信じる勇気が試される……。だから『道徳』……。面白いです。普通のテストならただの意地悪な問題ですけど、先生が作ると、そこにも意図があるんですね」

「はは、先生の作るものは、全部そうですね。一見ただの国語の問題に見えても、その裏には『どう考えるか』『どう生きるか』っていう、道徳の問いが隠されてる。……なんか、先生に全部見透かされてるみたいでちょっと怖いんですけど……。面白いです」

生徒たちは、一日がかりで挑んだテストが、ただの知識比べではなく、「道徳」であったことに気付き、改めて感心しきりだった。

「勉強なんて全部道徳やからな。自分の知識と向き合い、より高みを目指して磨き
をかける。生きていく中にあるものは全部が道徳なんや」

先生の最後の言葉が、教室の空気に深く、静かに溶けていく。生徒たちは誰一人
として言葉を発さず、その意味を噛み締めている。

「よっしゃほなら終わるか。起立。さようなら」

「さようなら」

その声は不思議なほどに澄んで、力強かった。

結論

ここに記すのは、あくまで現時点での結論である。るい先生と生徒たちが織りなす、答えのない問いを巡る対話の旅は、まだその途上だからだ。

本シミュレーションは、「正解探し」としての道徳授業を解体し、生徒一人一人が自らの思考で倫理的な問題と向き合う、新しい教室の姿を描く試みとして始まった。授業を通して、道徳とは記憶すべき「知識」ではなく、絶えず変化する状況の中で、自分自身の誇りを羅針盤として最適解を探し続ける、一つの「能力」であることが示された。

もちろん、本シミュレーションが描く教室には、理想化された側面も存在する。教師は極めて多様な意見を全員が納得できる形でまとめ上げ、生徒たちが最終的には真摯な対話に応じるという前提に立っている。また、授業の進め方については数

人が意見を出したらすぐに次の話題に移っており、完全にそのまま現実の教育現場で実施するのは現実的ではないと考える。さらに、より複雑な外的要因——たとえば、評価制度や家庭環境といった課題——については、本書の射程を超えるものとして、あえて捨象した。

しかし、その限界を認めた上でなお、本書が目指したのは、完璧な教育マニユアルの提示ではない。それは、道徳教育が向かうべき一つの方向性を示す、ささやかな「思考実験」である。本シミュレーションは、あくまでも筆者の思い描く個人的な理想ではあるものの、内容を複数回に分けるなどの対応で現実の教育現場でも十分に実施できる授業だと考えている。

願わくは、読者諸氏が、この教室での対話を追体験することを通して、他ならぬ自らの心に眠る「ものさし」に気づき、それを磨き始めるきっかけとならんことを。

鞠久 類

商標および免責事項について

本書内で言及される MBTI® (Myers-Briggs Type Indicator) は、Myers & Briggs Foundation の登録商標です。作中の診断や性格解説は著者個人の解釈に基づいており、公式の MBTI アセスメントや同社の公式見解とは一切関係がありません。本書に含まれる情報は教育的・娯楽的目的のために提供されるものであり、専門的な心理療法や医学的診断を意図するものではありません。自身の性格特性に関する悩みについては、専門の医療機関や認定カウンセラーに相談してください。

また、本書で紹介するメソッドを実践したことによって生じた一切のトラブルや損害について、著者および発行者は責任を負いかねます。読者の自己責任において活用してください。

本書はフィクションであり、作中の生徒と実在の人物とは一切関係ありません。ただし、作中の「るい先生（鞠久類）」には著者自身の考えを反映しています。また、作中で引用しているSNSの投稿や短編小説など、一部に著者自身の著作物を含みます。

参考文献

- [1] 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）』
(https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_02.pdf)
(令和7年12月24日参照)
- [2] 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』
(https://www.mext.go.jp/content/20250324-mxt_kyoiku01-100002608_01.pdf)
(令和7年12月24日参照)
- [3] 文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）』
(https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_03.pdf)
(令和7年12月2日参照)
- [4] 一般社団法人 日本MBTI協会「[公式] 日本MBTI協会—こころの利き手®を見つけよう」[公式] 日本MBTI協会 <https://www.mbti.or.jp/>（令和7年12月24日参照）

髓——理のない理性——

令和8年1月12日 第一版発行

著作者 鞠久 類

発行者 ただの洋楽好き

著作権法上の例外を除き、本書のいかなる部分も、電子的または機械的な方法を問わず、無断で複製、転載、または情報の検索システムに保存することを禁じます。

Copyright © 2026 by Kumiiko Bessho. All Rights Reserved.